水辰會雜誌

第四高等學校北辰會

明治三十二年三月五日發行

第貳拾貳號

（非賣品）

北辰會雜誌第二十二號目次

論說

ショペンハウエル天才論　大島義脩

史傳

佛國大戲曲家コルネーユの傳（承前）　潮來

橋本左内（承前）　文濟

雜錄

貧れ小言　木寒子

我國れ歌舞　霞生

"Schools" at Oxford. De. Havilland

Lautmalerei in der Sprache. E. yunker.

文苑

遊魂錄（承前）　紫水

高根れ月　花廼舍吹雪

をりにふれて（歌）　紫影

御題田家烟　高橋富兄

歌三十三首　千木花樵人

月桂冠　湖舟生

五十鈴の流れ　三諸

春興雜吟

俳句十九句　村上函峰

蘭相如論　明石華陵

福善禍淫論　荒岳

擬大塔王獄中上書　金井秋蘋

新年作

詩廿首

雜報

貞宮殿下御薨去　○嗚呼新年○迎新年○神機一轉○洞中天○青年歌文會成る○清玩與料○推心錄○寸鐵數件

北辰會雜誌第二十二號

論說

ショーペンハウエルれ天才論

大島義脩

ショーペンハウエルは天才を單に美術界に限れるカントの說を踏襲せず美術家詩人及思想家に互りて天才あるを認めたり又其說は其純正哲學と密接の關係あるを以て一層興味ありとす故に彼が天才論を窺はんとせば先づ其純正哲學を味はざるべからず

然れども彼れ哲學上の意見を叙述することは本論の目的に非ず亦此短篇の能くする所に非ざれば唯其必要なる限りを略叙して本論の小引たらしめんとす而して本論は主としてショーペンハウエルの著『意志及寫象としての世界』"Die Welt als Wille und Vorstellung" 第一卷第三十六節及第二卷第三十一章に據り其叙述の排置は殆んど全く教授クーノー、フィッシェル氏の『近世哲學史』第九卷第十二章に從へり讀者此等の書に就て攻究せらるれば本文の至らざるを補ふべきのみあらず本文は唯そが爲の階梯たらんことを期すのみ

ショーペンハウエル哲學の根本的思想は二派れ枝流の綜合にして此枝流は各復二個れ源泉を有す其一派は西洋思想にして一派は東洋思想あり西洋思想れ彼の哲學れ源となりしものは彼が『西洋に於ける二人の最大哲學者』と呼びたる『神の如きプラトン及び驚嘆すべきカント』是あり就中彼

が根本的思想構成の動機となりしものはカントは眞實躰(自存的物)の概念なりカントは之を現象以外に特立せる實在とし吾人の認識の形式卽時間空間及因果以外に超然たり(時間に限られず故に此時彼時に限りて在らず不生不滅なり空間に限られず故に此處彼處に限りて在らず不可分なり因果に限られず故に他に依て在らず自存なり)從て人智を以て測度する能はず人智の範圍內なる萬般の現象は其發表にして眞の實在に非ず眞の實在は認識以外の躰なりとせり彼は自ら全力を注いでカントが封鎖せし此秘庫を開かんとせり而して其關鍵をプラトンは觀念論に發見せりプラトンの觀念に就いて敎えし所は正にカントの眞實躰に適合す曰く觀念は尽く不可分の實在にして不生不滅なり之に反して個々の物躰は轉變無常なりと此の如き觀念はカントは不可知的眞實躰と全く同一にあらざるも極めて親密なる關係を有すべきものなりされば眞實躰の寫象はカントは之を否定したれども必ずやプラトンの觀念の邊に之有るべしとはショーペンハウエルの思惟せし所なり

是に於て彼は思想の第二著は此二の思想を綜合せんとするに在り現象の裏に眞實躰ありて吾人認識の形式に束縛せられずとし又觀念は不可分不生不滅の自存的實在とするの点は全くカント及プラトンを繼承せるも此二の概念を綜合する所以に於て彼は更に一歩を先人に進めたりと做せり以爲らく實在は認識の形式(彼は之を充足理法と名く)以外にあり是物の外部の性質たる可のらず其內部の力なり然れども吾人は物に於て外部の形を見て內部の力を見ず唯一の吾人に知らるゝ所は自己の內部なり自己內部の力は意志是なり意志は認識は單に其外部の性質に非ずして物其自身のなり此認識は何故に其在るが如くに在るものの理由なく否定すべからざる存在として知る故に充足理法の外にありされば意志のみは眞の實在にして意志の寫象はカントの眞實躰の寫象にして又プラトンの觀念の寫象なり一切の物は其自己より見れば意志にして其物たるは意志れ發現卽客觀化せるものなり是プラトンが物は總て觀念の寫影なりと云ひし所以なり斯くして彼が企てたる綜合は意志を中心として成就せり

彼が思想れ純理的方面は右の如く西洋哲學を繼承せるが其實踐的方面は東洋思想より得來りし所なり其源亦二あり韋陀の優婆尼沙土及釋迦の敎是なり根本的意志は數多及必然を離れて自由なる唯一躰として現象世界外にあり現象世界は迷妄の世界なりとは優婆尼沙土の說く所に合す此の如き意志は盲目無智にして生存繁殖の慾に充ち煩悶執著して此世界を苦艱の世界とす此意志を殄滅して解脫を得るに依てれみ始めて寂靜を得べしとは釋迦の敎ゆる所に合す彼料らずも遠き印度の思想に於て此一致を見出し直に取て其厭世的觀念を完成するに資したり

之を要するにショーペンハウエルの根本的哲學思想はカント、プラトン優婆尼沙土及佛敎の合成にして意志を本躰とし現象を迷妄とし意志を殄滅して皆空に歸し煩悶を脫して寂靜を享くるを目的とせる厭世主義なり既に意志を殄滅するを以て目的とせ卽其方法として採る所は美術及思想なり純粹の美術及高尙なる思辨は無我無慾にして私を交へず生存意志"Wille zum Leben"の手段たらず人生の實用に全く關係なきもれなり故に美術及哲學は解脫に導く所なり彼が哲學より胚胎せる美術哲學の見解此れ如くなれば美術界哲學界に於ける天才とは如何なるもれぞ推知するに難し

[illegible]

意志は無智なり智は意志の奴となり仕へて其役に服するものなり禽獸にては智は此關係を絶つ能はず意志の緣に繫がれて常に生存の用を成す人類にては時あつて之自由を得意志と離るゝの力を有す意志を殄滅するに至て始めて智は眞に自由なり彼は其結果は體軀の構造に現はれたとし其事實を擧げて劣等動物は頭部と胸腹部と合一し稍々高等なるものには其一端に局在し人類に至て肩上に高く特立し以て遠を視るべく左顧右眄生活機關と離れて自由の運動を有すヴェルヴェデレのアポロの像（ブロックハウス氏會語字典第一卷第三表第十一圖）の妙に此姿を寫せるを見よと曰へり智は意志に役せらるゝ間は人知は實利（interested）の範圍に限られ科學も理性も其外に出つること能はず哲學や美術の實利を目的とせざるものは起ることなし然るに觀念の認識は充足理法の外に在りて其眼前には相對的の物なし唯實在あり此の如き認識の主躰は亦個々の人にあらず非實利的無意無慾の『純認識主躰』（Reine Subject des Erkennens）に其認識の中に全く自己を忘れ自己を失ひたる沒我的主躰なり是に至りて實在的意志は自ら主躰となり亦自ら客躰となりて認識と意志の自識是なり是れ唯一眞實に有る所なり

常人は唯自己の實利上の智を有する而已其一切の認識及び行動は悉く自己を中心とし主觀的目的の爲に存す少數の人のみ自己を離れたる客觀的目的の爲に認識行動す眞に偉人と稱すべきは此少數の徒なり偉大なる世間的事業をなす者は英雄なり偉大なる精神的事業をなす者は美術家詩人及び思想家なり英雄の事業は人れ爲にす精神的事業は觀念を目的とす此觀念によりて物及び世界の本躰を闡明せんすとす物及び世界の本躰は或は直覺すべく或は思惟すべし一は美術の業にして一は哲學の業なり

思惟によりて本体の認識に到達するは最明瞭なる智を要す然るに意志は智を役して其私慾の用に資せんとし常に其明を遮蔽す故に明を得んと欲せば全然意志の束縛を脫却して玲瓏自在なるべからず是常人に取て甚爲し難き所殊に人生の實際世界に當りて愈々難し故に哲學は至難の事業にして思想界の天才に非ずんば其認識を得ること能はず

人生を實際世界の中に見る時は純智の認識を得ること難きが故に是を有りの儘に摸倣して實利より分離し直覺的に本躰の如何を示現するものを美術とす故に美術は全く思想外に立ちて少しの推理を用ひずして直接に本体に關する問題を解釋する者なり其根源は觀念の認識にして其目的は此認識の示現なり世界の實体は其觀念の認識せらるゝを自ら拒むに非ずと雖意志は絶へず是を其生存の目的に用ひんとし實利の概念を是に結合するが故に智の明は爲に遮蔽せられ易し美術は實利と結合するとなきが故に觀念の直覺は必然容易にせらる斯の如くにして美術は世界の映像にして純粹客觀的に世界の本躰の直覺を與ふ實際は存在としては認識せらるるものも映像としては認識せらるゝは映像は之を生存の目的に利用せんとする意志に制せられざるが故なり故にゲオーテ曰へり

[illegible] "Was im Leben uns verdriesst, Man im Bilde gern geniesst,"

映像と雖之に對して實際世界に臨むが如く吾人の意志を交へて之を慾求し利用する念を以て觀

するときは其美を失ふと同下く實際世界と之に對すると美術の如く無意無慾にして觀ずるときは其美を煥發す自然物の最能く此美を呈する者は大空及び星の眺なり

"Die Sterne, die begehrtman nicht, Man freut sich ihrer Pracht,"-Goethe.

ティッシエル氏詩人ヘルデルの句を以て之に配す曰く

Das ist eine weisse Möve,
Die ich dort flattern seh,
Wohl über die dunkeln Fluthen;
Der Mond steht hoch in der Höh'
Der Haifisch und der Roche,
Die schnappen hervor aus der See,
Es hebt und senkt sich die Möve;
Der Mond steht hoch in der Höh'.
O liebe, fluchtige Seele,
Dir ist so bang und weh'!
Zu nah ist dir das Wasser,
Der Mond steht hoch in der Hach'.

思惟に由るも直覺に由るも世界の本躰を觀ずるは目的あき認識たるを要す是れ凡人の能くする能はざる所天才の特徴正に是に在り此資性を備へたる者は事業界に於ける英雄よりも一層稀に出づる所なり天才は智の非凡なる怪物なり斯の如き怪物に二種あり其非凡に發達せる者は天才にして其非凡に萎縮せる者は白痴なり其發達は体格の上にも顯はれ常人の腦は重量は三ポンドなるにバイロンのは六ポンド、キュヴィエルのは五ポンドに達せり婦人は著しき才能を示すとあれども体格上決して天才たると能はず

天才も常人と同じき性質と有せざるに非ず其生存の慾に驅使せらるゝ間は同下く常人の生活を營む彼等も人なり只是れ神來を得たる人なり天才の智を常人のに比較すれば日光と燭火との如し其遮蔽せらるゝや暗黑あると彼此異ならず其光明を放つや其差只に千里而已あらずショーペンハウエル少時歐州歷遊の時シャムニーれ谿よりモンブランを望み嗟歎措のず久ふして忘るゝ能はず之を天才に比較せり曰く天才は之をモンブランに比すべし其頂は常に雲に覆はる然れども偶々早朝雲裂けて紅暾の峯に輝くに當り雲表に秀でたる天際よりシャムニーの谿に下瞰するときは其眺には何人も衷心深く感に打たるべし

("Die so häufig bemerkte trübe Stimmung hochbegabter Geister hat ihr Sinnbild am Montblanc, dessen Gipfel meistens bewölkt ist; aber wann bisweilen, zumal früh Morgens, der Wolkenschleier reisst und nun der Berg vom Sonnenlichte roth, aus seiner Himmelshöhe über den Wolken, auf Chamouni herabsieht; dann ist es ein Anblick, bei welchem Jedem das Herz im tiefsten Grunde aufgeht".)

天才の事業は其偉大なるに應下て氣力の集注を要す之が爲に意志の勢力を發揚するとと尋常の比

に非ず此点に於て天才と英雄とは其赴く所を異にすれども其出づる所を一にす意志の發揚は從て精神を興奮せざるを得ず故に卓超非凡の人は常に情の激しきものにして天才と冷靜とは相伴はず其烱々たる眼光を以て俗界に臨むときは蠅頭の顯微鏡に象大とおるが如く些事を過大視し却て其正鵠を失ふ其器大にして小局に容れられず一般に天才は俗事に應ずる世才といふもれを欠く之に俗事を委すれば其拙劣なるは勿論其製作一も實用に適するもれおし抑彼等の事業其物が生存慾の爲めにせしに非ざれば生活は用をなすべきの理おきなり音樂や繪畫や哲學や孰れの生活必須の具たるべき唯人生の華として賛美すべきれみ之と同ドく總て美しき物と用ある物とは兩立し難きものなり高き美しき樹は菓樹に非ず（吾人の誘る櫻れ花の如何に麗はしくして其實の如何に乏しきよ）最美しき建築は實用のに非ず社寺は住宅に非ず天才を俗事に用ゐんとするは高貴なる皿鉢を鍋釜の用に供せんともるに異らず天才と常人とを比すれば建築石材と金剛石との如し

畢竟天才は實用世界れ器にあらず其俗界に交はるや常に異域の感をおし望鄕の念に堪えず衆庶嬉笑れ中に在て獨り鬱憂寂寞を樂しむ天才は總て情の激しきと共に鬱憂おることは古人も屢言ひし所にしてシセロに據れバアリストテレス既に之を說けり Omnes ingeniosos melancholicos esse 此間の消息を最もよく傳ふるものはゲーテなり曰く

"Meine Dichtergluth war sehr gering,
So lang ich dem Guten entgegenging:
Daggegen brannte sie lichterloh,
Wann ich vor drohenden Uebel floh.
Zart Gedicht, wie Regenbogen,
Wird nur auf dunkeln Grund gezogen;
Darum behagt dem Dichtergenie
Das Element der Melancholie"

鬱憂は其故鄕にして世間は異域おれば其世に容れふれざるや怪むに足らず彼等多くは不遇亦已も世に求めず自ら友とし自ら語り濁流に遠ざかり獨り清うせんと欲すフッウストれ著者は詩人をして歌はしめて曰く（見よショーペンハウエルが如何に屢此詩人を引照するのを彼は彼の母と共にゲーテの無上なる崇拜者なりしおり）

"O sprich mir nicht von jener bunten Menge,
Bei deren Anblick uns der Geist entflicht.
Verhülle mir das wogende Gedränge,
Das wider Willen uns zum Strudel zieht.
Nein, führe mich zur stillen Himmelsenge,
Wo mir dem Dichter dem reine Freude blüht," n. s. w.

其不遇なるは彼等れ身に止まらず其製作も亦同ド運命を免れず美術品も著書も當時に顧みるものなく空しく塵埃の裡に埋もれて少數の知己を後世に俟つもれ概然り此語此哲學者自己の運命を語

れり）蓋し哲人の書は讀まれざる其理あり多くは讀書家は書物にて腹を肥やさんと欲するものなり彼等は書を鷄卵同樣に心得て產み立てなどと評判の高きものを爭ふて求むるものなれば也

（完）

險夷原不滯胸中、何異浮雲過大空
夜靜海濤三萬里、月明飛錫下天風

（王陽明）

史傳

佛國大戲曲家コルネーユ傳（承前）

潮來

此時に當りカルヂナル、リシュリューは國柄を執り威勢赫々たるに獨り之を以て滿足せず大に文學を愛し殊に戲曲を好み己れ亦著作とる所あり獨り政治上の歷史に其名を留むるのみならず文學史にありても亦其名を不朽にせんと務めしものから常に當時の名ある文學者四人を其帳中に侍せしめ之をして己が意を奉じて戲曲を作らしめたり四人とは則ちエストアール、ボア、ロベル、コルネテ、ロトルーなり然るにリシュリューはコルネーユの名あるを聞き之を引きて其社中に入れ以て古氏に名譽の地を與へたりと信ぜり實にシラーヌ、レ、チュイルソー、ラグラントバストラルの諸曲はロトルーと古氏の手に成れるあり。然るに古氏は元より貧窮にして衣食給せず其リシュリューの社中に入るは元と給を取る爲にして其本志に非ず蓋し社中にあるときは一にも二にも大僧正の意を奉迎するのみにて獨立の意見を以て縱橫揮摧天縱の才を現はすに足らざりければなり。古氏は其父を亡はざる以前より已に一家累を負擔するとなりトーマスと云へる少弟と其外多く年少の弟妹を有し家道頗る困難なりければ拮据して戲曲を著はし其報酬とリシュリューより與へらるゝ些少の俸給とを以て幽にルアンに日月を送り巴里に到るは只自身の戲曲を演ずるときと李氏の帳中に四人の同僚と著作に從事するときのみにして夏に至れば其親友エモンヴィルの領地（キュール）に至りて暑を避くるを常とせり。李氏は卿相の威を挾み古氏等を已が意のまゝに願使せんと欲せしのみにて古氏は文學上の事に至りては仮令卿相の尊を以て之に臨むもいつまでも堅く執て動かざれば李氏をして遂に Dé faut d' esprit desquite（彼れ服從の氣なし）との嘆を發せしむるに至れりのゝれば古氏も心に面白のふざると多ければ家累を負はざる可ふざるに托し李氏を辭して是より專心自家の著述に從事し李氏を辭せしときにメニデーを世に公にせり其中を仮り自ら心事と描ける有名の句あり曰く「夥多の敵に對し汝に殘る所のものは何ぞ……自己のみ」と以て其抱負する所を見るべし。時にシャロンと云へる老人あり昔は佛王の宮中に奉仕せるものあるが退隱してルアンに在り古氏に說くに西班牙戲曲の大に見るべきものあり取て以て則とすべきを以てす古氏則ち西の戲曲を研鑽し次でイリュージョン及び彼の有名なるシードの曲を公にせりシードは則ち西班牙れ戲曲家ギルレンドウカストロ氏の「シードの少年」（Las Mocedades del Cid）に據り作りしものにして悲壯

劇中に在つては古今其比を見ざる所なり、古氏の人心を感觸せしむる所は義理と情慾とを拈出し來りて之をして其人の心中に鬪はしむるにあり而して其情義の爭奪の情狀を描出せるの精巧あるはシードにある所より精巧なるはなし、其ロドリーグはシメーヌに向つての情と愛とシメーヌの父が已の父を辱めたるに報ずべき義理とれ間に挾まれシメーヌは又ロドリーグに向つての情愛と已れ父が已の戀愛せる情夫のために殺害せられたるに報ずべき義理とれ間に挾まれ此兩人れ心中の有耶無耶は如何計にて時に或は自ら自分の氣を勵まし退いては互に其情愛の羈に絆せ百憂千慮の淵に沈む樣中古時代の獷猩粗野任俠高節の風躍然として紙上に溢るゝ計りにて一とたびシードの出るや洛陽の紙價貴きは物かは佛國の文學社會は上を下へと贊稱(ドヨメキ)合ひ爲めに幾千の光燄を增すに至れり獨り佛國れ文學社會のみならず歐洲各國到る處としてシードを贊稱せざる者あく皆之を其國語に反譯するに至り當時歐洲にありては唯エスクラボーヌ(スラー語)語と土耳其語とに反譯せられざるのみなりければ古氏も人に向て大に之を誇稱せり、然るに李氏は大に此れ曲に反對し何とかして之が名聲を減せしめんとして學士會院にシードを下して之を吟味せしめたり學士會院は元より唯々として李氏れ意を奉迎するのみあれば之に從事すると五ヶ月にしてシードの欠点を摘發せり而して詩人スクデリーはシード中のシメーヌを以て父殺し、怪物、狂人などゝ罵るに至れり蓋しシードは中古時代の義俠の氣を描出せしものとはいへ其事實を西班牙に汲み頻りに其武勇を稱へしあれば后年西班牙人がコルビー市を奪ひ巴里全都を恐怖せしめたる時に於て西人の勇氣を皷舞せしは此シード與りて力あり又李氏が千條の法令をもて禁ずる能はざりし決鬪も此戲曲中

のヂエーグが其子に「殺せ或は死せ」(彼を殺そう汝殺さるゝかとの意)とて其子を激動せし一語は殺氣蕭颯として反つて大に決鬪の勢燄を增せしを見れば李氏れ忿怒も左こそと察せらる然し李氏は此忿怒に加ふるに古氏の才を猜むと其强岸にして屈從の風なきとを忌み百方之を貶せんとするに至りては何ぞ其偏僻の甚しきや抑も猜忌心あるは英雄の常あるか、然るに李氏の猜忌も學士會院れ非難もスクデリーの罵詈もシードの上には何等の功果をも及ぼす能はず世人はシードを賞贊すること非常にして凡そ物事を褒むるには皆摸擬(アヤカリ)て(Cust beaue comme le cid)(シードの如く善し)と云ふに至れりボアロー曾て曰く《宰相はシードに齒向はんとて黨を結べり、巴里全都のシメーヌを見るロドリーグの如し、學士會院は一致してシードの吟味を要せり、然るに世人は反て堅くも之を嘆稱せり》古氏も當時李氏のために痛く反對せられしを知り李氏の死後歌ふて曰く《人は名高き彼の大僧正の善惡を稱へども、我が文も我が詩も彼の善惡に付きては何も云はざりめ、其惡を云はんとすれば彼は余に善を爲した、彼れ善を云はんとすれば彼は余に惡をなした》。

其後三年を經て一千六百卅九年ホラースの曲出でたりホラースの出づるや世人の之に反對するもれあるとシードに異あらず然れども古氏は驕然反對者を輕侮して曰く「ホラースは二人頭領(ヂユカンフイル)のために罪せられしも遂に世人れために放宥せられたり」と蓋世自ら知音あるを云へりあり。

シンナは其次年に出づ原をセネークのトレーテに酌めり是れ又大に世人の喝采を得たりことはヴオルテールがルヰ十四紀中に大將軍(グラレ)コンデは大詩人(グラレ)コルネーユの詩を讀みて落涙すと稱するを見るべし

ユーゼーヌ、ヂェルゼー「曰くホラース曲はコルネーユは才智の尤も勁健に尤も擬設的(ハリヂナル)の發生せるものにして之を見れば總て實質、勢力、高明をもて充たされ片々たる冊子中に羅馬族制の狀況を描出し風俗の純良なる規律の嚴正なる制度德義の完美にして世界の帝國中に傑出する狀をして紙上に躍然たらしむるに至りては詩人の能此に至りて極れり、」

シンナノ出つるやバルサック古氏に書を與へて曰く「足下のシンナは能く疾病を救治せり足下はチートリーヴの羅馬をしてせざる時の如く壯麗なくしむ而して足下に歷史に借りし所は貸せし所より遙かに優れり」ボアローは之を見て世間の不正の攻擊に對する好答辭ありと賞揚して曰く「シンナは窘迫せられたるシードをして生れしむ」と

己にして古氏は貴族に列せられリュートナン、ゼネラル　ヂレドリューの女、マリー、ドゥ、ララレペリエールと婚すランブーイエ館(劇場)と聲息を通し初めしは此時に在り

古氏のラ、ウーヴを公にするや文陣出陣後二度目の著作なるに時の文學者大に之を賞贊しスクデリーは曰く Lasoleil estlevé, Vehte-row' etoils と云ひメトレーは之をプロート、テランスに比もトルーは之を呼んで好敵手と云ひ遂に自ら企及する能はずと云ふに至れり、シードに於けるアカデミーの意見は著者シャプレンはシードを以て傑作と云へり、古氏はラ、シュイバントを公にするや戲曲に統一(ユニティ)あるを知らしめ曰く總てれ行爲は主要の行爲に歸着すべく、場所廣袤は演劇の廣袤より廣きはなく時間は演劇れ時間より長きはなく此くして全体の諸幕相連絡せざるべからず」

古氏は學士會院のシードの批評出せし時にエキスキーズハ、アリストと題せる手簡中にて自信

する所を述べて曰く

Ye ne dois qu' à moi seul tout ma tensmrrée,
Eopensetoujours n' aveq, point de rufl,
Aqui jifasse tort eule traitaut l' égal.

是より先き三年古氏はルアンの大僧正に擬す詩を寄せて曰く Me pauci fecere praem, nullusque secundum.

英人はベレヂョンソンを呼びて英のコルネーユと云ひウォルター氏は古氏の悲壯劇の出づると待ちに待ちて之を譯するを此上なき名譽、此上なき樂となせり、Vossius 曰く余はソフォークルユーリピードよりコルネーユを好むと

ル、マントッールは實に佛國諧謔劇の嚆矢と云ふべきなり。ビュルシュリーはパ、サンビールの歷史中より材料を取り來りマダーム、セヴィニエ大に之を嗜讀す、此中にあるマルヂアンは古氏自ら云ふものゝ如し、

古氏は千六百四十七年一月廿二日を以てメーナール氏の欠席あるに當り撰ばれて學士會員となり四十九年トリオンフ、ドゥ、ルイ、ル、ヂュストの編著に與れり

古氏の三子長は騎兵カピテンたり二子も其士官たり季は僧となる、古氏は晩年ルヰ十四世より些少の俸給を賜はりて餘生を送れり、古氏の妹一は學者フォントネルに適き有名なる學士會院の恆久書記フォントネルを生めり古氏の年老ふるや少弟トーマスに倚れりトーマス亦文學を以て名一

世に高し、然るにボアローは大に古氏の窮狀を憐み熱心にコルベルに之を推薦せしかばコルベルも之を憐み給する所ありコルネーユも大に慰むる所ありき、然れども古氏の死に瀕するやルキ王も之を憐み二百ルキを與へしも事已に晩く及ぶ能はずして瞑せり、時に年七十九、一千六百八十四年九月(或は十月)一日なり、後世佛國革命の際に有名の女丈夫シャロット、コルテーもコルネーユ家より出づと云ふ

古氏は散文には短なり、ヴォルテールは古氏のシンナをモレトロンに呈せし書後に書して曰く「文体と云ひ感情と云ひ頗る奇なる書と云ふべし人之を見てポンペー、シンナの精神意氣を描出せると同一の手に出でしとは誰も認めざるべし嗚呼高逸なる詩を作りし人も散文に至りては遂に同行なる能はず」

フォントネル曰く、古氏は丈可なり大く、容貌は質朴にして先づ通例に飾るとなく、顏容は快氣を帶び、隆準にして口美、眼光烱々として容貌常に活々たり、其詩を誦するや極めて力を入れ愛嬌なく發音は明瞭ならず、言語少く、言を飾らず、

(完)

橋本左内(承前)

文　漸

老練猾智にして遠謀ある家康、全國を統一して多年の宿望を達し、覇を江戸に開くや、上は朝廷を初めとして、大名を抑へ小名を抑へ學者を制し武人を制し下百姓を壓し、且學問宗教に迄干渉を加へり、然れども彼等は皆耳を垂れ首を伏し、天下默々として、一人れ之に抗するもの非らず、

家光に至りて益其基礎を堅め天下の富と權とを擧げて、之を江戸に集中し、幕府の威勢は能く飛鳥を落すに足れり、然れども榮枯盛衰を繰返せる所の歷史は、永く其が繁榮を專有するを許さず、其運命は一高一低一上一下の間に漸次衰亡に傾き、遂に外交の一大問題の爲に奈落の底に沈み了りぬ、固より此が原因は壓制の反動、制度より起る弊害等を數ふ可しといへども、浦賀の砲聲は實に江戸城れ幾重に疊み成せる大盤石の根底より崩壞し去りし者にして、若し之れ無くんゞ猶多少の壽を長ふすると能はざりしに非ざるべし、

外艦の渡來は之れ宇内大勢の然らしめし所たるは、近世の萬國史を知る人の容易に首肯する所なふん、然れども當時の我國に取りては、偶然の出來事にして寢耳に水の感ありし、即嘉永六年六月三日米艦初めて浦賀に闖入せるの報を聞くや、陶然として太平の醉夢に在りし國民は、憤々たる睡眼を摩して狼狽狂奔し、或は永く筐底に潛める秋水を取りて之を琢き、或は久しく蠹虫に任せたる甲冑を出して之を引繕ふと共に、天下の議論は紛々擾々として底止する所を知らず、茲に攘夷を唱ふれば彼に和親を唱へ、彼に開國を主張すれば此に鎖國を論し、而して外交の問題は引いて内政に及ぼし、尊王とあり佐幕となり、更に尊王は攘夷と和し、佐幕は開國と合し、互に論難攻擊を加へり、云はゞ當時の情勢は、多年幕府が壓搾を加へたる嚢の破綻に乘じて、嚢裡の不平者が手を出し足を伸して藻掻き立てたる者あり、然れども幕府は其當初より攻擊を受けたるに非らず、寧ろ天下の多くは之を助けて外患に當らしめんと欲せしあり、惜哉一定の國是を確立せざりしと、輿論を容れざりしとは、痛く天下の同情を失ひ、遂に板挾の境遇に陷りて、自ら縊るゝ

に至れり、

此時に當り更に幕府の難題たりしは儲君論なり、之に對して越侯の意見左内の運動は、之を後に讓り外交上に於ける越侯及左内の意見に就て今少〳〵述ぶる所あらんとす、

侯は決して頑迷なる鎖國家に非らずして、寧ろ列侯の中に於ても稀なる文明主義なりしは其れ痘苗を外國に求め、士民に諭して種痘せしめ、或は醫員に命じて蘭法醫學を修めしめ、又明道館の中に洋書習學所を置きたるにても知るべし、然れども米艦渡來に際しては攘夷の意見ありし、即ち嘉永六年八月七日外國に對する處置に關し、幕府に答申したる所に依れば、『彼理書中兵威を挾み御國法を無知の政體と稱す其本邦を蔑視するの甚敷憤激に堪へず全船を破碎して國威を萬國に輝うされずでは相成難く存候(中略)當夏渡來の儀は既に昨年より端々巷說も有之候處別段御嚴備も無之臨時書翰御受取相成候事故一時の御權道とも申難く有志の徒は甚以て殘念至極の處再び御權道と稱せられ和親御約定相成候はゞ全く兵威に恐れ彼が術に陷り候姿に候(中略)何れの道にても御許客無御座方御長策に可有御座乍併御許客無之ときは必兵端可相開は勿論に候へば一戰の御覺悟相極候はでは御斷りは難被成云々』と曰へり、之を以て觀れば、侯は硬强なる攘夷者にして、之が爲めに必ず戰ふべき事を覺悟せり、然れども其後米艦再び來り、尋で魯艦來り、英艦來ふんとするに及んでは、宇内の大勢を看取し、且幕府も既に和親を結びたれば、侯は全然和親論を唱へり、即ち安政四年の建白に曰く『方今の形勢鎖國すべからざるは具眼の者瞭然我より航海を始め諸州へ交易に出候を却て企望の折に候故道理を以て來り乞候者ば御拒絶無之筈に候得ば「ミニ

ストル」は儀も同斷にて候强兵の基は富國に可有之候へば今后商政を釐め貿易の學を開き有無相通じ皇國自有の地利に據り宇内第一の富饒に致し度云々」と、而して侯をして是に至らしめたるは左内の論之を動かせしに非らざる無きやを疑ふ、

左内は烱眼かる夙に開國論を唱ひ以て固陋なる鎖國家を嘲り無謀なる攘夷家を笑へり、而して是れ左内が洋學に精通し能く海外の形勢を達觀したるが爲めなり、則ち彼が議論は自覺に出で根據を有す、曰く「只今と相成候て鎖國獨立不可致は固より識者に於ては瞭然に可有之候へば固より拒絶不相成は不俟論候へども唯如何せん廟堂上は小兒輩迎も其邊の咄出來候者一人もなし」と、昂然として自ら表識し、愚論者を睨視したるを見るべし、且彼の開國を唱ふるや、我國古來の美風は益之を發揚し、唯彼が物質的文明を輸入せんと欲せり、故に曰く「仁義の道忠孝の敎は吾より開き器械は工藝術の精は彼より取候樣に仕掛候はゞ彼等も返て吾に服膺可致場合に可運とも被察候」と又曰く「近世西洋大に學術伎藝を研究殊に數十年戰爭止まざりしにより兵科を始め器械を製し物產を開き候事及び度學算術等に至る迄頗る實驗を盡し且其精巧を極め間々皇國と雖も未だ及ばざる所を發明仕候故彼の長伎を取て吾皇國の利器を御補足被成云々」と然れども彼又弊害の其間に伴ふことを先見して曰く洋學宜興、善興則其利甚多、不善興則其害不可勝言、と又「亂截驚濤鯤鯨橫、桅竿絨旗海日明、尖鼻睜目渠何者、曰米曰佛曰魯英、萬里鄉隔盈々水、來何所求云互市、願重民用愛布粟、遠方珍貨愼勿喜」と吟じ、「叨りに新奇使用を喜び外國を誇稱して皇國を卑視致候樣の所行無之樣云々」と云ひしが如きは不幸にも輕佻浮華に流れし維新後の我國情に取り

て豫言たりしに非ふざる無きや、

開國家たる左内は又和親論者たり、されば嘉永六年米艦の來るや、彼は迂濶なる攘夷家れ間に立ちて、卓見なる和親論を唱へて、曰く「和議主張仕候も深思御座候義にて中々當今の國力形勢戰鬪に由て固守六ヶ敷(中略)畢竟戰鬪申立候とて忠孝の誠に不發時は後世より申候へば忠孝とも不奉存一旦蠖屈の計にて和議を唱候とて行々皇國を不汚見込候はゞ是姦邪にも候ましく(中略)倉皇狼狽して却て割地清和の術を說出し或は危急れ節に臨んで逃出候僞忠臣の例も御座候」と、されど彼は一概に和を講せよ、戰ふ勿れといひしに非ふずして、和せんと欲せば益臨戰の準備を爲し、撒兵の法伏兵の法番兵斥候の法騎兵れ法水戰の法其他奇正互變錯綜紛紜の術を竭さゞる可らずと論せり、

以上の議論に依りて之を觀れば、當時外寇とし云へば彼の元寇の難を想起し、輕舸を馳せ、火箭を飛して、彼等を擊退し得可しと信ぜる迂論の多き中に於て、獨り彼れ卓絕したるを見る可し、然れども吾人は以上に依て、左内が自覺せる開國家たりしを證し得ば足れりと爲す、更に吾人は進んで左内の外交上に於ても大經綸に就て、知る所あらんと欲す、勿論彼が議論には瑕瑾も有る可く、誤解も有る可しと雖も、是れ深く彼を咎む可ふざる也、寧ろ宇内の大勢を揣摩して我國の外交方針を論斷したる活眼高識は、横井佐久間の諸豪に讓らずと云ふ可し、乞ふ彼が同藩の士村田氏壽に與へし書を見よ、

當今れ勢日本の事務國内の御處置と外蕃御待遇との二件に可歸奉存候」外蕃御待遇に付ては海外の事情第一御推察有之度候」英は慓悍貪欲魯は沈鷙嚴整何れ後には魯へ人望可歸奉存候」偖日本は迚も獨立難相叶候獨立に致候には山丹滿州の邊朝鮮國を併せ且亞墨利加州或は印度地内に領を不持しては迚も望の如くあらず候」此は當今は甚六ヶ敷候 其譯は印度は西洋に被領山丹邊は魯國にて手を附試居候其上今は力不足迚も西洋諸國れ兵に敵對して比年連戰は無覺束候間却て今の内に同盟國に相成可然候」然處亞國其外諸國は交致候も不苦候へども英魯は兩雄不並立國故甚以扱兼申候」其意は既にハルレス口上にも歷然其上近來の爭鬪之跡にて明白に御座候」依之後日英より魯を伐ち先手を賴候歟又は蝦夷箱館借呉候旨可願出候其時斷然英を斷候歟 又は從候歟定策可有之事」小拙は是非魯に從ひ度奉存候其譯は魯は信あり隣境あり且魯と我とは唇齒の國我魯に從候はゞ魯我を德とす可く」候さすれば英怒り可伐我此我願あり我孤立して西洋同盟の諸國に敵對は難致魯之後援有れば仮令敗るゝも皆滅に不至は了然に候 然れば此一戰我弱を强に轉じ危を安に變候大機關に御座候て此より我日本も眞れ强國に可相成候其上戰爭迄には是非魯國并亞國より人と倩ひて我國の大改革始水軍陸戰其精勵可爲致事と奉存候」偖右樣魯之親昵を得候には所謂難報之恩無之しては不相濟候魯國へ我より使節を以て和親を乞候積其段には種々心算有之候得共筆にては難述候」扨魯へ國を托し候迄に外より擾亂被致候ては不相成候 其迄は何分亞墨利加を賴付英夷之跋扈强梁等は成丈拒貫ひ候事此亦色々工夫も御座候へども何も應答言辭の間におくては口には難述奉存候事」依之交易ミニストル指置之二ヶ條相許其中交易は矢張官府交易に致度候間勝手交易は相斷申度候事」阿片并借地之事は斷り港は堺神奈川箱館長崎の四ヶ處位に極置申度候」何分

亞を一個の東藩と見西洋を我所屬と思ひ魯を兄弟唇齒となし近國を掠略する事緊要第一に奉存候」餘りに英國を見下げ魯國を買被りたるよ、されど輓近れ日清戰爭が、同一の侵略主義に基づきしを思へば、彼の論は眞に先覺れ言たりと謂はざる可らず、惜哉彼は毫も其經論を實行するの機を得ずして空しく議論の人として終りしや

（未完）

"Words pass away, but actions remain."

Napoleon.

雜錄

貧れ小言

木寒子

There is a tide in the affair of men,
Which, taken at the flood, leaves on to fortune;
Omitted, all the voyage of their life
Is bound in shallows and miseries;
And we must take the current when it serves,
Or lose our venture.　—SHAKSPEARE,

晴、疊上を馳せるが如く、漁獲豐に、蚕を樂まーむる者は海なり、曇、龍虎を鬪はすが如く、船舶覆り、蚕を泣うしむる者も亦海に非ずや

妖雲萬里、浪は淼茫として天を衝て怒り、鳥は迢遙として高く鳴て去る、亞非利加れ蠻大陸を西する千里、孤影寂然、風濤に堪えざる一小島あり、人絶ゑ草茂りたる處、落魂の一偉人住めりき渠曾て蓋世の雄圖を抱き、區々たる短身能く幾萬れ貔貅を翻弄し來て、掌上の玉の如く威を六合に振ひ、勇を八紘に鳴ふし、廣漠たる全歐の地、將に渠が双脚鉄鞋の下に蹂躙せられんとせるの瞬間、危機一轉、霹靂一聲、敗軍の汚名は流竄の屈辱を伴て、渠を奈落の窮底に陷れにき、白雲悠々たる處、僅に故國の面影をしのびつゝ、悽風慘雨の配所に呻吟すること積日、滿天の白露は昔あがふの戎衣を濕して冷に、昨れ壯夢は今の幽魂に映ドて亂る、深夜床上展轉の苦悶を忍ぶこと屢、一日其侍者に語て曰く、『アレキサンダーも、シーザーも、シャーレマンも、余も、皆等しく力を以て大帝國を建てにき、獨り彼クリストは愛を以て其帝國を建て、其永久廣大なる、今人猶彼が爲めに死を恐れず』と、嗚呼烏の將に死せんとする、其聲や悲し、人は窮厄辛酸に沈んで始めてよく其天眞れ言をなす、運命の潮流一度渠を導て、赤道直下赫々の榮光に浴せしめ、再び渠を驅て、北極氷海の嚴寒に泣かーめたるれ時、當年の英魂ナポレオンゞ、荒寥たるセント、ヘレナの月にむせびつゝ、空しく椰子の葉露と消えゐんとして、僅に此妙音をもらせしもの、豈一片の眞理に非ずとせんや

世路の多變多樣なる、一起一伏、一浮一沈、飄然榮之、忽然衰ふるの變幻恠異、何ぞ茫々たる海

洋のそれに等しき、一望果なき大海、其靜かるや、雲收り風靜に、烟波漾々、四望悠々、輕帆に乘じて白鷗の夢に隨ふを得べく、舷頭酒を載せて酣醉一番、遐邇の漁歌に清吟を和するを得べく、而も些の危難を憂ふるを要せず、唯夫れ其變ずるや、風怒り雲湧き、濁浪澎湃、滿目悽愴、萬雷乾坤を動ゐし、蛟龍暴威を逞くし、晃々たる閃電時に暗冥を破て慘愈慘、沛然たる段雨は屢々風濤を助て暴益暴あり、變此に至れば、幾萬噸の鉄艦艨艟も、秋風れ落葉、春雨の飛花よりも、ろく、左轉右迴、沈沒に非れば則ち破壞の悲運を免るゝ能はざらん、嗚呼吾人は靜變此の如く極りある蒼海を、片々たる扁舟もて横斷せんと擬するものに非ずや、觀ず來れば岌々乎として殆いかな、もし夫れ人靜り草眠るの深夜、私に思を人生不定の冥々路に馳せんか、膚粟を生じ、背汗を流し、恐る可き、明なるべくして明ならざる問題は、幾度ゝ吾人の小胸裡に往來せんなり、曰く吾人は何が爲に生れたる乎

言ふなれ、是已に陳套の事に屬すと、陳套必ずしも明燎を意味せず、古來幾多れ哲人が常に解釋せんとして得ざりし此問題は、陳腐にして斬新あるものあり、知らず、今來誰か之を解釋して、以て進路に彷徨せる吾人に確乎たる安慰を與ふるもれぞ

恩を受る一日、よく其主に仕へて三年、其義忠を盡すものは犬に非ずや、鈍にして朴、炎々燬くが如きの日、田畑の間に漫歩して老農の勞を助くるものは牛に非ずや、彈雨硝煙れ裡、山を攀ぢ、川を渡り、時に血痕淋漓たる鞭韃を受けながら、東奔西走、風に嘶く一聲、背上の主を勵まして、之と生死を共にするものは馬に非ずや、馬や牛や犬や、皆是狂蠻の獸、而も誠實彼の如く、剛直彼の如き者あるは何ぞ、一に其分を知れば なり、其天職を重んずればあり、換言すれば其何が爲に生れたるかを知れば なり、嗚呼人は何が爲に生れたる乎、食はんが爲乎、眠らんが爲乎、樂をんが爲乎、悲まんが爲乎、將た又死せんが爲に生れたる乎、此疑惑一度氷解すれば人は皆洒々落々、詐譎、禍害、讒毀、殘忍等、あらゆる人爲的惡德冀くは社會に其蟠根を斷つを得ん、吾人をして繰返さしめよ、吾人は何が爲に生れたる乎

ゲーテは言ひき、人は自由にとて生れたるに非ずと、果して此の如くんば、苦痛も悲哀も束縛も虐待も奴隷も貧困も皆是を忍ばざるべからず、天下何ぞ此背理あらんや、人生れて自由を愛するは言を待たず、唯知らず古往の人果して自由を得たるか、今來れ人果して自由を得能ふものを、人は皆自由を得るの權利ありといふ、然れども見よ、古來幾萬れの生靈が、自由を買はんとして費したる生命と財産との大なるは歷史の明に示す所に非ずや、人は實に自由を得たるに非ず、之を買ひたるあり、北米獨立戰爭は確に吾人に教ふるに非ずや、自由は、血と金との外何物も之を買ふ能はざることを、彼の骨を碎き、身を粉にして營々役々、農に工に商に、銖錙の利を爭ひ、星を戴て出で星を戴て歸るの勞を執るは何の爲ぞ、貧を去て富に就かんとするあり、彼の高臺玉樓の内、錦衣繡帳に捲られ、食に鮮魚あり、行に腕車あり、擧手投足、意に隨て毫も憂ふべきなくして而も戰々焉、兢々如、晝は權門の伺候に忙はしく、夜は黄金の守衛に勞るゝは何の爲ぞ、已に富んで永く富まんとするあり、其貧あるや、詭計百出、其富めるや、焦心苦慮、露間あるもの、一は富まんため、一は富を保たんためのみ、由是觀之、人――少くとも現時の人――は唯惡貧好

富の觀念に左右せらるゝもの、富を以て其最終の目的とせるには非るの、富は是權、必ずしも之を厭ふべきに非ず、唯知らず、百萬の富果して能く自由を買ひ得るや否や

既に富を欲す、之を求むるに手段あらるべからず、既に手段あり、之に巧拙あるを免れず、其手段を弄するに巧なる者は富み、之に拙き者は貧に陷る、是所謂運命の分岐する所、而も巧なる者必ずしも正しからず、拙き者必ずしも正しからずとせず、巧にして不正、拙にして正なるもの、世其類多し、所謂不義の富、正義の貧は此に於てか生ず

然れども思へ、富や貧や、唯是物質的豐裕の程度を意味することゝ、同時に想起せよ、彼那翁晩年の述懷を、吾人は富强に求むべきに非ず、貧强に厭ふべきに非るを覺るあり、中村の百姓の土臭き足は遂に廟堂を踏み、曾て金冠を戴きし佛王の頭は一朝斬臺に露と消えしはいはずもがな、身を屠牛者の群に起して、政宗の大權を握り、忽ち讒姦の毒舌に死せし英のウォルゼーや、蓋世の氣、拔山の勇を抱て、垓下一敗、首を敵軍功を貪るの犧牲に供したる烏江の重瞳子や、信長は天下に臨む日なふずして光秀に弑せられ、光秀は三日にして秀吉に誅せられ、秀吉死して杯土未だ乾かざるに一族殄滅、永く其後を絶ちしが如き、ローマの興亡、グリースの起伏、ペルシアの衰亡れ如き皆是運命循環れ天理、至悲至慘の一端を現はせるもの、靜に探り來らば、上下悠々幾千歲、東西茫々幾萬里、其歷史は同一の悲慘を新しき形式もて再演するに外ならざるあり

原子と原子と相擊て振動すてふ物理上の原則は、又直に之が社會の狀勢に應用すべし、社會は人と人と相觸接して活動するもの、常に衝突、反動、紛雜の騷擾を來すは固より其所あり、圓滿平等は到底之を現實の世界に望むべからざるあり、況んや各人豺狼の慾、蜀望の願を逞くし、有限の物質界に無限の慾望を遂げんとす、甚しい哉其偏見、禽獸は知らず、草木は知らず、苟も生を人に享けて、心と情とを有するもの、現實に理想を對照せば、事時に心に合するあり合せざるあり、物時に情に適するあり適せざるあり、此に於てか得意となり、失意となり、厭世となり、樂天となる、是佛敎が差別の俗諦の上に平等の眞諦を立て、耶蘇敎が All men is equal before God と絶叫して吾人に慰藉を與へんとする所以に非ずや

何が故に得意となるの、何が故に失意となるかの絶對的解答は之を言はず、唯之を現今の人に見るに、富めば則得意となり、貧しければ則失意となる、比々皆然りとなす、昔はシセロ老齡の悲むべき所以を說て曰く、人をして人事より離れしむ一、体軀を衰弱せしむ二、殆ど總ての快樂を奪ひ去る三、死に近かしむ四、と、是實に移して今人貧を悲むの所以とあるを得べし、貧者は社交に遠かり、体軀を枯らし、苦痛を忍び、遂に死神の犧牲となる、富者は之に反そ、短言すれば、富は幸福を持來し、貧は幸福を奪去ると、是灼たる黃金れ輝ける處は千里を遠しとせず、銀塊を其面に投ぜらるれば喜で之を懷にする所以、厭貧好富の極、同輩相排し、十年の故舊一朝にして敵視するに至り、宛然群猛叫喚の修羅場を呈するに至る、嗚呼此陋習今や滔々たる社會を風靡せんとも、人はいふ、是所謂競爭より起る自然の結果、競爭は進化を來し、進化は文明を意味すとせば、此風も亦文明れ影響として己を得ざるに非ずやと、夫れ然り、何ぞそれ然らんや、進化は勢力に非ず方法なりとは西哲の言、人之が勢力となりて進化を促そべきもの、此弊風を底止そる

自ふ術あるあり、曰く富者の知足、曰く貧者の滿足、則是、

富者何物ぞ、吾人之を知ふず、吾人は疑ふ、所謂富者自身も亦之を知らざるべし、何となれば、ゲーテのいひし如く、富れ何たるを知らざれば富者たる能はずして而も眞に富の何たるを知るもの世に乏しければあり、唯知る富者は非常の權力を有することを、彼等の耳には祇園精舍の鐘も諸行無常の響あく、彼等の目には沙羅双樹の花も盛者必滅の色なきあり、富は人をして執鞭の士たるを甘せしめ、人をして屈辱を忍ばしむ、大なる哉富の力、而も所謂「富者衆之怨也」の古來事實として現はるゝは何ぞや、富者多く私利に汲々たれゞあり、細民を使役する犬馬の如く、公益を厭ふこと蛇蝎の如く、而も其一身に奉ずるの厚き、或は嬋妍巧に羞媚を裝ふの妖姫に千金を投ず、或は怪窟醜を掩ひ嬌を弄するの待合に戲れ、悖德沒理覥として顧みず、株券、邸宅、嬌妾を誇るを其能事となす、此の如くして人の怨を招くもの、もとより其所なり、富はもと絶大の力なり、之によりて天下を改善すべく、發達すべく、進歩せしむべし、唯其之を有するもの多くは肉慾以外、黄金以外に高尚の趣味を有せざるがため、彼等は永久金庫の番人として、日夜、不滿足と不安心とを買ふのみ、彼等は實に富の奴隷となりて天然の自由を樂む能はざるもの、是則ち物質的富者にして心理的貧者に非ずや、而も世俗之を以て幸福となす、怪なる哉

吾人濫に富者を厭ふものに非ず、富者にしてもし眞に愛國經世の士たらば、彼の富を以て最後の目的となすは愚をやめ、之を方便として活用し、社會的、政治的將た宗教的公共に利用せん、此の如くして始めて富の何たるを知れりといふへく、富者の福音は世に傳はるあり、もし徒に其心中

烈火の如く、飽くなきの慾を逞せんとせば、吾人は無學文盲の富者に教ふるに、先づ知足の二字を以てせんのみ

貧者何物ぞ、物質的欠乏に苦めるもの、謂あり、昔は悉達多、淨飯大王の子として、數十の貴人にかしづかれ、飽食暖衣意のまゝなる深宮を脱し、苦行難業、遂に不滅の聖教を布き、基督は賤工貧窮の家に生れて困苦多年、遂に一宗を開きぬ、共に是物質的欠乏の中に大業を起せしもの、殊に釋尊の如き自ら好んで物質的欠乏の地に就きしに非ずや、知るべし貧は精神的偉大たるに於て何等の防害をも與へざるを、而も彼れ凡俗に至りては然る能はざるなり、彼等は爛たる富者の外觀に眩せられてひたすらに之に達せんとし、日々戚々たるもの、其眼中に映ずる所のものは、宏大なる屋宇、閑雅なる庭園、鮮麗なる衣服あり、彼等は之を得んとして焦心苦慮す、其勉勵、刻苦、忍耐、謙遜、從順は其内心燃ゆるが如き嫉妬を掩ふの裝飾たるのみ、而も社會の進化は日に秩序的、組織的となり、容易に一攫千金の巨利を博せざらしむ、其目的を得ざるもの、嫉妬は一轉して失望となり、絶望となり、悲觀となり、自棄となり、暴怒となる、佛蘭西革命の如き、確に其一例に非ずや

愚鈍なる貧者は其心事寧ろ憫むべし、少は多を欲し、小は大を願ふは人情の常、唯其百方術を尽して卑劣陋醜を厭はざるに至りては君子の笑を招く所以、是主として重きを現實に置くの罪に坐す、彼等は知らざるあり、人は現實の世界に生息すると共に、理想の世界に生息せざるべからざることを

吾人の精神は常に天地の間に躊躇し、逍遙し、徘徊し、物を衝き事に觸れて其活動をなす、もし身心奔走に疲れ、世界の事物又來て吾人の心情に適合せざるに至らば、西人の

Ein Mühlstein und ein Menschherz
Wird stets herumgetrieben;
Wo Beides Nichts zu reiben hat,
Wird Beides selbst zerreiben.

と言ひしが如く、心自ら破壞され、磨滅され、瓦解され、落魂零丁、其進退に窮す、是貧者の多く絶望自棄する所以、彼已に現實界の失敗者たり、殆ど死者たり、唯其理想界に呼吸するの余地あるれみ

貧者は幸福を得ずといふ、夫然り、何ぞ夫然らんや、幸福とは心的滿足の程度、自ら安ずるの觀念をいふなり、幸福はもと是無差別的博愛なるもの、甍輝く金殿にも、雨もる茅屋にも、王者の温体にも、乞食の冷懷にも、平等に宿れるなり、幸福は內界に潛在せるもの、人之を其外界に求む、根本的に誤れり、エマーソン曰く、農夫は地位と權力とを羨めど、「ホワイ、ハウス」に籠れる大統領の勞苦は其知り得ざる所なりと、外觀的尺度を以て人の幸福を測る、甚しい哉其淺見。

貧者は快樂を得ずといふ、快樂とは何ぞ、綠酒に醉ひ、馬車を驅り、佳人を擁し、青樓に眠るの謂ゥ、是貧者のよくもる所に非ず、出でゝは貴嬪雲集の間に談笑し、入ては婢僕叩頭の虛榮を受くるの謂か、是貧者のよくする所に非ず、吾人の所謂快樂は耳目れそれに非ず、精神のそれなり、松風颯たる別莊に夏を忘れ、錦褥温く暖室に冬を知らざる、必ずしも快樂に非るなり、昔は窮巷陋屋に肱を曲げて枕とあし、飲食時に窮するの顏回ありき、孔子之を見て「樂在其中矣」と賞したるに非ずや、ダイオゼネスは蒼々たる九天の下、僅に雨露を一小樽に凌ぎ、之を家とし、之に起臥し、之に飲食して悠々自適、アレキサンダーをして其自由の樂を羨ましめたるに非ずや、クレーサスはペルシアに捕はれて其物質的快樂の過去を果敢みしに非ずや、類例を擧げ來らば實に屈指に暇あらざるべし、吾人豈好んで貧を欲するものあらんや、唯其快樂の必ずしも物質的に存せざるを自覺せんとするのみ、

幸福や快樂や其存在を物質界に求めんとする難し、之を精神界に求めあば、西人の所謂「心靈は一切の物を我有とするを得る」の妙理を悟らん、「到る處我は天來の音樂を聞く、其美音や必ずしも、星辰れ間に在らず、百花の內に在らず、嬌鶯の喉にあらず、却て萬物の淤泥中に潛む」と、萬物の淤泥中に潛むもの豈天來の音樂に限らんや、快樂然り、幸福亦然るなり、二者近く吾人に纏繞して吾人の注目を待つ、而も吾人は之を遠きに求めんとす、誤れる哉、詩人をして之を見せしむれば飛花落葉悉く詩、名優をして之を見せしむ荒村陋巷悉く一の長舞臺たるなり、快樂幸福の心を以て世を見る、眼に映ずるもの、人蓄、草木、有情、無情皆是快樂幸福の種子たらざるあけん、彼の東坡晚年配謫の逆境に沈んで、洒落悠々、「今遠竄荒服、負罪至重、無復歸望、杜門屏居、寢食之外更無事、胸中廓然實無荆棘」と言ひしもの正に是に非ずや

吾人はゥの徒食的無爲的生活を喜ぶの「ユートピアン」を惡む、「出門皆有營」、貴とあく賤とあく

老も幼も其職をする所に從て衣食するの要は吾人之を知れり、唯かの經濟的行爲は人の利己心によりて發動せられ其公共心によりて制限せらるてふ原則の必ずしも事實に非ずして、人――殊に富者――の利己的に行動し、利己的に靜止するれ外、一片の公共心を有せざる如きものあるを慨す、苟も世に公共的仁慈の事なかちんか、「名馬常馱痴漢走、好妻多伴拙夫眠」的不自然より生ずるの不平は滔々社會を擾亂するに至らん、寒心せざるべけんや

一小話あり、兒童戲に石を蛙の面に投ず、蛙曰く This may be play to you, 'tis death to us. と富者の貧者に於る亦此の如きものあり、前者の爲す所、一擧一動、悉く後者の凝視せる所、有福家たる者豈慎まざるべけんや、富者公に尽し、貧者自ら安ず、彼の知足と此の滿足と兩々相並行せば、平靜穩妥、「雲在青天水在瓶」の自然なるを得て、貧者怨まず、富者奢らず、衝突は圓滿と變じ、差別は平等と化せん

雜然たる漫言是一片の理想に過ぎず、嗚呼誰か社會的基礎を改築して此の理想を現實にするものぞ、グリースの哲人曰はずや、社會の改良は智に非ず情に依ると、情ある哉情ある哉

孤燈影くらき客舍、夜寒の虫に過去れ逆境を追懷すれば、聯感續乎胸を衝て起る、則ち筆を執て其一端を叙す、時に窓外讃美歌の洋々たるに驚て之を見れば、密雲突如隣館教會堂上にのゝりて天忽ち雨あらんとす。

我國れ歌舞

霞生

古來我國の歌舞音樂に付き記述せし書少なからずと雖も、一定れ秩序れ下に組織せられ、一部の史として編著せられしは、唯一故小中村博士の歌舞音樂略史有るのみ、其他は各特種の舞樂に付個々の沿革を說ける者の外、隨筆漫錄等に其局部の面影を止むると共に、唯此れが材料に資すべき歌謠の集有るのみ、されど彼の一部れ歌舞音樂略史は、故博士の手にありし物とて、其材料撰擇の上に其組織の上に殆んど間然する所無きは、チャンバレン氏が同書の序に『蓋し惟ふに此著作は誠に翁が多年勞力の結果にして充實致れり盡せり、後の研究者或は其發明の餘地無きを見て失望落膽する者有らん』と曰ひけん如く、此書の外に此書を凌駕するの編著をなすは殆んど出來難き事なるべし、唯だ此書に付き惜む所は昔の精あるに比し今の疎あるに有り、此は著者が國學に精通せらるゝの結果あるべきも、其昔を餘りに精しく記述せられたるの結果、或は煩に陷り讀者をして事實の複雜と參考引用の書の送迎に遑有らざらしむるが如きは、著書の蓄積餘り有つて反つて通俗を遠ざかりし所以なるべし、余の本問題の下に記さんと企つる所は、專ら同書の缺を補ひ傍ら其發達變遷を略述せんと欲するものあり、然れども雜誌に連載し得るの範圍内に於て而も淺學余れ如きが述ぶる所なれば、其粗放單純にして動もすれば誤謬臆說に陷るは免かるべからざる所あれど、其は同學諸士の斧正を待ち後日に之を正さん事を期するものあり。

抑も歌舞と云ふ、必ず此れに伴はるべき音樂なかるべからず、音樂なくして歌舞の存する事は難く歌舞存して音樂を缺く事亦難かるべし、然るに余の今や我國の歌舞を記さんとして音樂に及べざる所以は、一は余の不識ある我國音樂の繁にして錯雜せる、殊に其術語れ煩はしく解し難き到

底短日月の間に此れを窺ふ能はざるを恐れ、全体に通じて餘りに事實は複雜して、組織の上に紊亂を來すを恐れて故らに此を割愛せり、然れども其歌舞に尤も密接の關係ある部分のみは、音樂として分ちて此れを記さず、唯だ離すべからざる關係に於て便宜に此れが變遷を無秩序に文中に挿入せり、乞ふ其心得を以て讀過せられんを。

我國歌舞の沿革を記すに當り、先づ便宜上此れを四期に分つ、即ち第一期は神代より初まり外國歌舞の入り來る頃に終る、第二期は欽明天皇の御代より始まり武家時代の起る頃迄とし、第三期は田樂猿樂等の最盛時代を述べ、我國歌舞妓の起る迄を限りとし、第四期に於ては專ら德川時代に於ける諸種の歌舞を記し、明治維新を以て其終結とおさんとす、余の少しく力を盡して說かんとするは即ち此第四期にあり。

第一期

其一　神代

古史の傳ふる所により我國最古の歌を求むれば、先づ伊邪那岐伊邪那美兩尊の阿那邇夜志愛云々を以て濫觴とすべきなれども、彼れを以て直ちに和歌なりと斷言するは如何はしく、殊に一歩を讓り單に歌は感情を表白するものなりと(此の如きは到底曰ひ難きなれども)は不完全なる定義の下に彼れを以て和歌なりと云ふを得べしとするも、此の如きは余が爰に記すべきの限りにあらず、唯に唄ひし而已にては、或は文學上より、又は謠ひ物等の事を論せんとする上よりは元より研むべきものなるも、余はかゝる範圍迄も侵して進まんとには非ず、されば彼の八雲立つ云々の歌を始め萬葉時代の和歌等凡て聲に出し曲節を付し、或は假令樂器に上せたる物にせよ、苟も歌舞に關係なき限りは全く此を省略する事とおしめ。

何れも國に於ても歌舞の起原を明かに知るは到底爲し難きの事なるべし、其起原として後世より認めらるゝは、或事情の下に殊に時人は注意を引きし物の、古記又は口牌に傳はりしに過ぎず、而して、既に其以前に歌舞の存在せしは明らなる事實なり、平田篤胤氏も『舞を舞ふ本の意は謠ひとも、なほ心歡ばしきに得堪へざるまゝに、手を伸し膝をうちてその謠ふまにゝ拍子を合せつゝ、猶足づまに立ち舞て其歡ばしき情を述る態なれば』と曰ひし如く、如何なる未開の狀態に有りても苟も人に感情の存する限りは、必ずや折に觸れ時に付け其情れ發して、終には單純無味乍らも一種の歌舞をなせしや疑ふべきに非ず、されば我國歌舞の起原として古記に見へたるは石窟開きの時にあり、即ち天照太神の事により天石窟に隱れ給ひし時、世の常闇となりしを群臣愁ひて、石窟の前に種々の物を供へ飾り給ひて、齋奉りし時天鈿女命

手次繫天香山之天日影而爲鬘天之眞拆而手草結天香山之小竹葉而於天岩屋戸伏汗氣而踏登杼呂許志爲神懸而掛出胸乳裳緒忍垂於番登爾高天原動而八百萬神共咲

其の滑稽にして單純なる歌舞の樣と、簡單なる粧飾とを推知するに足る、此時謠ひしとて傳はれるものは。

比登布多美用伊都牟田那那夜許許能多理毛毛智用呂都

此は歌と曰はんよりは、詞と云はん方穩當なるべきが如しと雖も、此を謠ひて舞をなせしと曰へ

ば、此れを以て我國歌舞に用ひし歌の最古あるものと曰ふも誤には非るべし。

即ち此れ我國歌舞の起原にして、又神遊びの始めあり、神遊びは後樂と稱し、今も猶宮中の內侍所及神社に其名殘を止めぬ、當時の樣を今より想へば勿論無味單純なる者にして、舞ひ唄ふに一定の方式の存するなく、所を定めず時を限らず隨時隨所に行はれしは明かなるも、殊に石窟開き以後時人の注意を惹く程れ事實存ぜざりし故、正史に記さゝりしなるべし、後外樂れ輸入と共に神樂も非常の變更を來し、遂には其古への面影を失ひ、嚴乎たる規律の下に漢風れ調子を用ゆるに至れり、其外樂輸入後の神樂は第二期の部に於て述ぶべし。

此れに次ぎて天照太神の天石窟を出で座しゝ時、天原及び天下自ら照り渡りて、八百萬神等皆相俱に見て其面の明らかなるより、愛に欣喜の情禁ずる能はず。

伸手而歌舞相與稱曰阿波禮阿那於茂志呂阿那多能志阿那佐夜慈飫慈矣

此れを以て大直會の起原とす。

當時は前にも少しく述べたる如く、歌舞に一定の系統有るなく秩序の存ずるなく、唯だ感情の發する所歌となり舞となりし者なれば、今より推して此れが沿革を記し發達の樣を述ぶるに由なし、然れど此頃に於て折につけて歌舞せしは、前述の健速須佐之男之男太神以佐世木葉爲頭刺而踊躍せられし事等見へたれば、此点に關しては疑ふべきに非ず。

尙當時の風俗として殯時にも歌舞せし事あり、即ち天稚彥が死せし時其婦下照姬夫の死を悲しみ慟哭する聲天の原に達せし故、天の群神天降りまして八日八夜歌舞せし事見ゆ、此れを始として

此俗習は長く人皇の世迄傳へられたり、此の殯時に於ける歌舞の大体の沿革を知るには、本居翁が古事記傳の一節を見るを便とす、即ち『天皇(允恭)崩坐し處に新羅王聞天皇既崩驚愁之貢之調船八十艘及種々樂人八十云々泊于難波津則皆素服之云々張種々樂器自難波至于京或哭或歌舞遂參會於殯宮也、天武卷(書紀)天皇崩坐し處に云々次國々造等隨參、赴各誄之仍奏種々歌舞、持統卷に元年春正月丙寅朔皇太子率公卿百寮人等適殯宮而慟哭云々奠畢膳部來女等發哀樂宮奏樂二年冬十一月乙卯朔戊午皇太子率公卿百寮人等適殯宮而慟哭焉於是奉奠楯節儛云々これも同天皇の大御殯の時なり、又繼體卷に近江の毛野臣が新羅より還さまに、津島にて死たりしを本鄕に歸し葬るとて淀川を船より上る時に、妻の歌に比擺弩駄喩輔澤能明樓云々などあり、』此遺風として今も見るべきは神道に於て葬送の節に、樂を用ゆる猶ほ殆と祭典に於けるが如き、少しく其名殘を止めたりと雖も、有遠に歌舞をる事は何時より止みけん、今より推知すべかゞず。

其時下照姬の唄ひし歌は所謂夷曲として今も尙傳はれり即ち。

阿米那流夜淤登多那婆多能宇那賀世流阿那陀麻波夜美多邇布多和多良須　阿治志貴多迦比古泥能迦微曾也

此を夷曲と曰ふは後世朝庭の樂府にて呼び十名なり、即はち古へより傳はれる歌の中にて殊に優れて美はしきものは此を樂府に採用し管弦にのけ舞にも合せて奏せしを、後より呼びて何曲何振等と稱へしにて、此曲の外古今集大歌所の歌に近江ぶり水莖ぶり四極山ぶり等あり、又今は傳はらざるも續日本紀に難波曲倭部曲淺茅曲廣瀨曲八裳刺曲等の名稱見へたり、而て右に揭ぐる歌を

特に夷曲と名けたる所以は、書紀に此歌と共に并べ記せし歌に『あまざかる鄙の女のい渡ふす瀨と石川片淵のたぶちに綱張りわたし女乃寄に寄し依り來ねいしかばかたぶち』とある歌は首は鄙と曰ふ語をとりて名けしなるべし。

又彥火々出見尊兄火闌降尊に苦められ遂に海宮に趣きしも、後潮滿瓊を得て歸り此瓊を以て兄の惡業を報ひ給ひし時、兄尊此れを畏れて罪に伏し永く弟尊が俳優れ民たらん事を誓ひしも、猶ほ弟尊の慍解けず相共に誰給はずとりて、兄自ら

著特鼻以赭塗掌塗面告其弟曰吾汚身如此永爲汝俳優者乃舉足蹈行學其溺苦之狀初潮漬足時則爲足占至膝時則舉足至股則走廻至腰時則捫腰至腋時則置手於胸至頸時則舉手𦖞掌自𠆢及今曾無癈絶

此の如くにして起り而て此れの後世迄も隼人の舞として其名殘を止めたるは、職員令、國史令式等の書に見へたれど、後世に傳はりし隼人の舞は風俗歌舞にして、名は此れの後を襲ふと雖も歌舞は實は全く異なれる者なる事を記臆せざるべからず。

尙此外神代に鎭魂祭等の式ありて猿女命の歌舞せし事等有れど、其は人皇時代に於ける鎭魂の條にて述ぶる事とし、此より少しく神代の樂器に付き記さんとす。

天沼琴　此は大和琴と稱する物の始源なるべく、此名の史に見へ初めしは大國主尊其妻須世理姬と共に、須佐之男之尊の髮を其室毎の椽に結びつけて、取持其太神之生大刀與生弓矢及其天沼琴而逃出

せし時にあり、而て天沼(音瓊に通ふ)琴は其名の示す如く赤き玉にて飾れる琴にして、而も其絲筋は大和琴の如く六弦なりし事は、彼の石窟開の條に『加奈止美命興竝天香弓六張而爲緒』と有るを以て知るべし、(古事記傳には天沼琴ありとし、其は神の來て詔言し給ふ意より出たりと云へど、余は古本の古事記により沼琴の當れるを信ずる故、此所には沼琴となしたり)猶古事記傳には此條の解に『つら〳〵思ふに上代には夫婦の結びをなすに、必ず女の親の方より聟に琴を與へて其を長く夫婦の中に契とせし事にぞありけむ、』と云へり疑はしけれど序なれば書き加へつ。

右琴の外鼓笛及木を合せて拍子をとる、即ち現今の拍子木樣の樂器存せしが如し、即ち神代卷伊柒冊神退ませる時の事を『土俗祭此神之魂者花時亦以花祭又用鼓吹幡旗歌舞』とあれば、其頃已に鼓の存せし事は知るを得べく、又笛は所謂天鳥笛の名稱あるものにして、此は拍子木樣の器と共に又石窟開きの條に出たり、即ち『採天香山之竹於其節間彫孔而吹鳴木木合合而備安樂之聲』と有るを以て、此等皆神代に昔より存せし物なるを知るべし。

笛及拍子木の類の神代に存せしや否やは此れを確證する能はず、其は此等の事を記せるは元々集本朝事始御鎭座本記等にて、皆中古に撰ばれたる書なれば單に此れみを以て考證と爲す能はず、故に略史には此等の說を悉く排したり、然れど神代に琴の存せしは記紀共に記して確然たりとせば、已に琴の存せし時代に笛、拍子木類の存せし事は、假令此等の諸書に其名の載せふれざるにせよ、其存在を推定する蓋し失語の臆說に非ざるべし、誰か疑はん、秋は高く霜は坤輿をとあて、虫聲の唧々たるを耳にし、吹く木枯の松の梢に自然の音樂を奏するを聞きては、必ずや淸音嘵々

たる篠笛の製作を試みしや自然の勢の然らしむべきを、況んや笛は音律を正すに尤も適當なる樂器たるに於てをや、又拍子木の類は完全なる樂器として形造られざりしにもせよ、既に歌舞するとは曰へば此れが音調曲節を整へんため、或は手を拍ち石を打ち木と木と相擊つが如き事は、人情の常、必ず此をなせしや疑なし、故に余は特に此等の樂器を神代に存せーるのなりとして記一置まゐ。

（神代之卷終）

"SCHOOLS" AT OXFORD.

"Schools" is the generic name given to all exams. at Oxford, and they are subdivided into Honor Schools and Pass Schools, and these again into, Law, History, etc.

There are three necessary qualifications for entering Schools, the first is plenty of spare cash, for strange to say you have to pay for the privilege of undergoing one of the most wretched weeks of your life; the second is the possession of a black coat and white tie which from time immemorial has been the dress prescribed by the statues for suffering victims: the third qualification is the possession of a fair amount of knowledge gathered with infinite labor and destined in most cases to be of little practical use in after life.

Granted you are the happy possessor of these, you struggle into cap and gown,*(1) and go off at the unwonted hour of half past nine to the Schools themselves; you wait there for some time in-

company with fellow sufferers talking the most barefaced "shop" until at last you are driven in herds into the various examination sooms.

Here of course, you troubles really begin, for in addition to the paper dealing with subjects which you were unfortunate enough not to have looked at in your reading, the atmosphere is most oppressive, and a clining gown does not adn to your comfort, but verily one man's meat is another man's poison, for herein do the ignorant score, for after a few hours of this heat they manage to faint, get carried away, and get through their exam. by an "aegrotat"*(2) The number of people who faint, iis in direct ratio to the difficulty of the paper, and it must need no slight skll to carry it through suecessfully.

The papers last about three hours each, and then you go out to lunch, probably buttonholed on the way by some hopeless bore who waots to know whas you thought of question three, or how many sheets you sent up. It is interesting to hear the opinion of people on their own papers: the "dead plough"*(3) as a rule thinks he has bone well, whereas the man who has really done well is usually most wretehed, convinced that he has come a hopeless cropper.

Trying to forget your troubles in your lunch, you then return to the schools at two to stay till five. This process conues for from three to ten days, and at its termination there is not very much left of the candidates, they look a deploradle set of wrecks. The monotony is occasionally varied

by men utterly sick of the affair, and going out after half an hour; their faces are worth studying, depicting as they do a mixture of disgust at the conduct of the examiners and joy at the theught of getting out into the fresh air again.

But even when all the paper work is over there is worse in store, in the dreaded *viva voce*. When the *viva* is over one has still to await the appearance of the list which may not come out for a month if there are many men in that particular school, or on the same day, if there are few.

The result of the "final schools" is that you get the degree of B. A. Simply residing at a University for the period of three years does not entitle a student to a degree: he must pass all examinations required. In many ways the system of exams. is similar to that employed in Japan.

(W. A. de Havilland B. A)

Notes.

(1) All students are required to wear a cap and gown while residing at the University. A student's or undergraduate's gown is much shorter than a graduate's and is without the ribbons worn by the latter.

(2) "Aegrotat",—certificate of ill-health during the period of examination.

(3) "Dead plough",—one who has hopelessly failed. A University expression.

LAUTMALEREI IN DER SPRACHE.

(von E. Junker.)

Ohne auf die Theorien über den Ursprung der menschlichen Sprache einzugehen, ist es wohl nicht zu viel behauptet zu sagen: Ein grosser Teil jeder Sprache besteht aus Wörtern, welche direkt den zu schildernden Begriff versinnlichen, so dass man aus dem Klange des Wortes schon auf seine Bedeutung schliessen kann. Dies geschieht vor allem dadurch, dass die bei den Thätigkeiten verursachten Geräusche nachgeahmt werden. Aber auch die einzelnen Vokale und Konsonanten haben eine besondere, innen eigentümliche Klangfarbe, und auf ihrer geschickten Verwendung beruht nicht zum kleinen Teile die Wirkung eines schönen Gedichtes.

In Folgendem will ich versuchen, diese Hauptgedanken näher auszuführen und an Beispielen zu erläutern.

Was zunächst die reinen Naturlaute betrifft, so müssen wir hier wieder unterscheiden:

a) solche, welche noch formlos das betreffende Geräusch einfach wiederzugeden versuchen, und meist als Interjektionen oder Adverbien gebraucht werden, und

b) solche, welche durch annahme von Flexionsendungen zu wirklichen Begriffswörtern geworpen sind, und an rechter Stelle verwendet nicht wenig zur anscheulichkeit und Wirkung der Rede beitragen.

beide Arten nennt man auch nach einem griechischen Worte Onomatopoëtika.

An Wörtern der ersten Klasse sind manche Sprachen sehr reich. Ich erwähne nur aus dem Japanischen:

bura-bura, guzu-guzu, kachi-kachi, katchiri,

kwan-kwan, pachi-pachi, pappa-to,

para-para-to, pata-pata, pachiri, pempen,

(vergl. Klim-bim!), pika-pika, pichi-pichi,

pii-pii, piri-piri, pompon, sasa, soro, etc.

Im Deutschen kommen solche Ausdrüke in volkstümlicher Sprache auch nicht selten vor. Ich erinnere nur an: tick! tack! bauz! knacks! miau! quak-quak! hahaha! hihi! Die deutschen Kinderreime sind besonders reich an solchen lautmalenden interjektionsweise gebrauchten Wörtern, so z. B. in dem allbekannten Steckenpferdliedchen:

Hopp, hopp, hopp! Pferdchen lauf Gralopp!

Über Stock und über steine,

Thun dir ja nicht weh die Beine,

Immer im Galopp! Hopp, hopp, hopp, hopp, hopp!

Tipti, tapti, tap! Wirf mich ja nicht ab!

Sonst bekommst du peitschenhiebe;

Pferdchen thu mir's ja zuliede! Wirf mich nur nicht ab! Tipti, tapti, tap!

Pitschi, patschi, patsch! Klatsche, Peitsche, Klatsch!

Musst recht um die Ohren knallen. Ha! das kann mir sehr gefallen.

Peitsche, klatsche, klatsch, Patschi, patschi, patsch!

Oder in No. 225 von Uhlands Volksliedern:

Ein Hennlein weiss, mit ganzen Fleiss.

Sucht seine Speis' bei einem Hahn.

Und hub dann an zu gacksen an: Kaka-kaka-nei,

Das Hennlein legt ein Ei.

Backen wir ihm Küchelein.

Mäuselein und Stränbelein.

Und trinken auch den kühlen Wein: Kaka-kaka-nei!

Zu prächtiger humoristischer Wirkuug hat Uhland die Worte: Husch, husch! Piff, paff! Trara! in seinem gedichte: "Der weisse Hirsch" verwendet.

Wichtiger als die obige Klasse sind aber die in den Sprachschatz als zuständig aufgenommenen naturmalenden Wörter, denen ihr rein onomatopoetischer Ursprung noch heute anzusehen ist. Sehr gut hat schon der alte Logau diesen Charakter der deutschen Sprache in dem folgenden Sinngedichte ausgedrückt:

"Kann die deutsche Sprache schnauben, schnarchen, poltern, donnern, krachen,

Kann sie doch auch spielen, scherzen, lieben, tändeln, kosen, lachen"*

Namentlich sind es Zeitwörter, welche die durch sie ausgedrückten Thätigkeit versinnlichen. Folgende Aufstellung dürfte wohl die wichtigsten derselben enthalten:

Ächzen, ächzend, ächzender Greis; balzen, balzender Anerhahn; bellen, bellender Hund; blöken, brausen, brüllen, brodeln, brummen, bruzeln, donnern, dröhnen, flüstern, flöten, gackern, gellen, girren, glucken, glucksen, gröhlen, grunzen, hallen, heulen, huschen, husten, hüpfen, klappen, klappern, klatschen, klingen, klingeln, klirren, klopfen, klitschen, knuspern, knallen, knarren knattern, klatschen klingen, klingeln, klirren, klopfen, klitschen, knallen, knarren, knattern, knischen, knittern, knistern, knurren, kollern, krähen, krachen, krächzen, kratzen, kreischen, lauten, läuten, lispeln, lachen, meckern, murren, murmeln, miauen, piepen, piepsen, pauken, pfauchen, pfeifen, platschen, plätschern, plauzen, pochen, poltern, prasseln, puffen, plumpen, quaken, quäken, quietschen, quieken, raspeln, raspeln, rascheln, rasseln, räuspern, rauschen, raunen, röcheln, rollen, sausen, säuseln, schallen, schellen, schluchzen, schmettern, schnarren, schnalzen, schnattern, schnauben, schlucken, scharren, schreien, schillern, stöhnen, summen, surren, tönen, tappen, tuten, trommeln, trompeten, wehen, winseln, wispern, wiehern, wimmern, zirpen, zischen, zischeln, zwitschern.

Derjenige, welcher die Schönheit der Sprache recht auf sich wirken lassen will, muss diese

Lautmalereien hören lernen, für ihn sind summende Fliegen, kollernde Puter, säuselnde Linden, zirpende Heimchen, rauschende Wehre mehr als gutgewählte Wörte, sie sind ihm Bilder, der inneren Anschauung durch das Ohr vermittelt. Man muss die Treppen "cnarren" und die Bäume "rauschen" hören! Die wnnderbare Wirkung vieler Dichtungen ist in der Klangmalerei dieser versinnlichen den Wörter zu suchen Man höre nur die Meute in Bürgers "Wilder Jäger":

Laut rasselnd stürzt ihm nach der Tross,
Laut klifft und klafft es frei vom Koppel,
Durch Korn und Dorn, durch Heid und Stoppel,
Risch rasch quer über in Kreuzweg ging's
Mit Horridoh und Hussasa.

Wer sieht nicht die Totengerippe lebhaft vor sich, wenn er denselben Dichter Lenore hört:

Und das Gesindel, husch husch, husch,
Kam hinten nachgeprasselt,
Wie Wirbelwind am Haselbusch
Durch dürre Blätter rasselt.

(Fortsetzung folgt)

岩間ちちし水も今朝はとけろめて
苔の下水猶求むらん　西行

文苑

遊魂錄（承前）

紫水

寂殺たりし秋風いつしか凪れ音と變り、冷々たる月光今〳〵も冬なふんとして、叢底れ虫の音霜に枯れゆく夜半の空、疾みにやつるゝ我子の床のべに、今日を盛りと咲き滿ち〳〵花れ、夕べの風に散り〳〵と見ては夢おどろく母人の、風にまたゝく燈に、我子の身の上を思ひ合はする心れ中やいのなりけん。

君が入院してより、稍快方に趣きたりといひ〳〵は、心うらにやありけん、雲時にして病勢復た舊に復して、君が枕邊にゐけたる躰温表は、唯徒らに高領深谷を畫くのみ、今までは音なふ毎には、窘しき中にも必ず應答はしたりしに、今は眠を閉ぢ口を噤ざて雙語も出さず、枯木の如く病牀に横りて、唯昏として眠るものゝ如し、母の看護何の至らざる所かあふん、藥石滋養何の缺くる所うあふん、さるに服藥更に其驗なくして、君の日に衰へのみもくはいぶかし、嗚呼是れ死病なるべきか、はた診察の誤れるかるう、遂に母なる人はこを疑ひぬ、母は謂へり、此病院に入りてよりはや幾日になりぬれど、未だ何のしるしもなくして、見らるゝ如く、唯義勝の衰へのみゆくを見れば、妾の如き愚痴ある女の心には、ひたすら診察の誤れるやう思はるゝなり、いのでる れ上は金澤病院に入りて、心の限り治療して見んと思ふなり、くそしも何も此病院よりは立優れりと云へばと、あはれ蔭とも頼むおのが子の、生死の境に立至りては、誰のは思ひ惑はざるべき、げに親と云へば、おのゞ齡はかへしても我子れ世を長からしめんとねがうものを、人の子の忘るまじきは父母のめぐみなりけり、

遂に君は金澤病院に移りぬ、内科長れ診斷も乞ひ、以後は蓐を新にして一層のてあてを盡し、みとりの助けにとてう、君が從妹ある人もはるゞ〳〵のぼり來りて、看護は一層れ厚きを加へられぬ、あはれ北國醫院の白眉たる此病院に入りながら、しかも此二なき看護をうけながら、不思議にも君の五躰は尚日に衰へのみゆきぬ、藥の外に物も進まねば、五尺八寸をぬける君が長軀は、日に日に細りゆくのみにて、はては骨と皮とになり、唯奄々たる一縷れ息のうすゝに通うばかりとはなりぬ、あはれ君は遂に復た起たざるべきか、さりとては春秋尚ほ淺く花を待つべき齡なるに、骨肉なふぬ我等さへ共にやつるゝ心地のせらるゝものを、血をわけ〳〵まことの親れ心の底はいかなりけん、まして父なる人は早き頃に不歸の客となり、はらからは皆すでにこの一づきて、母と君と

の外には唯一人の姉上あるばかりなりと聞くものを、まして母人も六十路に近き齢とて、せめては君が學成りて世に譽ある日にもあひ、愛しき君が看護にて心のこさずはてなんものをと、重ね〳〵も恃みをかけし君なるものを、今は其の若木をささだて、殘らんとする祚の蔭れいうに淋しく思ひしなふむ、

故郷なる骨肉は皆のぼり來りぬ、療養は尚ほ一層厚きを加へふれぬ、あはれ人の命の人の力もて如何ともすべきものなふんには、君が病は速に癒えたりしものを、病勢はかくても日につのりもくのみにて、はては嚏痰に血を交ゆるにさへ至りぬ、嗟呼是れ君が遂に彼の恐るべき病に犯されしなりき、今は君もかくと悟りけん、あはれ故郷とて名醫に乏しといふにあふず、死して骨を埋むるなふば、せめては故山の土にとて、つひに君は故郷に歸りぬ、行く君は固より死を決したれど、起たずと見て別るゝ我等が心中はいかなりしぞ、生別もと死別にまさるとはいへど、いのでこの別れにまさるものゝあるべきや、

すでにして年も暮方になりて、二週の休暇に故郷の椿萱を歸省せし折、途上なれば草鞋ながふ立寄りて病容を聞くに、母はなは床を離れずといふ、さりながふ病は惡きかたにもあらざるにやといへば、さなり、惡きかたにもあらざれどまたよきのたにもあらず、たゞ病躰の衰へのみもくをいかにせむとてはやさしぐみぬ、我等も胸ふさがりて言葉も出でず、力なくも門を立出でぬ、あゝ足は君が庭を蹈みながふ、遂に君の容姿に接するを得ず、君が金城に在りし時はやいたくやつれたりしものを、今も尚ほ日にやつれゆくとは、あはれどこまでか君のやつれゆくらむ、

丁酉の年は明けぬ、我は例のごと賀狀を飛ばして知己朋友の加齢を祝しけるが、さすがに君が許へはいたづきれ程を憚りてありしに、あはれ其君より先づ賀狀をうけんとは思ひきや、我はあまりの意外なるに驚きて、あまたゝびうちのへしかがめけれども、龍躍り虎驅るが如き筆法は、まがう方もなき君が筆なり、唯長病に筋骨の力れ衰へけん、筆勢のほどありしより稍弱きを認めしのみなりき、我はあまりの意しさに、とりあゑず一書をとばして我が怠りをわびつ、休暇の終るを遲しと君ゞ館を音ひしに、我は再び其の意外なるに驚きぬ、快き方なればこそと思ひの外、身を切る如き咳嗽れ聲は襖を漏れて聞かれたりき、母は出でゝいへり、病は惡きかたとにはあふねど、いつ癒ゆべしとも定めねばいつ〳〵かになりゆかんとも定めがたし、されど氣に勝てる心ばかりはつゆ平生にも劣ふず、聞きて給へや此元日の朝なりき、起しくれよといへば、いふがまゝに起しやりしに、端書を三十葉ばかり買ひてよといふ、此病中に何にかするといへば、友なる人へ年賀狀を出すべけれゞといふ、友なる人もいましゞ病めるゝとはよく知り給ふべければ、何にいまゝより賀狀をうけんと思ひ給はんや、强てさるゝとをして病にさはりてはなかゝにわろし、ことしばかりはそをやみてんやといへば、稍むづかりし面もちにて、わりなきゝとをのたまふもれのなり、我は病みたりとて人は病まぬものを、我は不幸にしてこのくは中折したれど、學びの友は一日は一日より學識を增して、今はめでたき年を迎へつるものを、いかでそを賀せずてやあるべき、我身のさちなきを思へば、なかゝにさちある人を祝うべくこそとて聞きいれず、せんすべなくて二十葉ばかりあがなひ來りしに、我に墨すらせて賀狀をものしそめぬ、始めの程は、恭賀

新年の四文字の外に、何か細き文字をも書き添へ、が、三四葉かきてあとは唯それ四文字のみをしるし、十葉ばかり書きて、苦るしければとて打伏せしが、殘りは遂にまた書のざりきとて、はや聲は痛く曇りたりき、あはれさきに君がふりはへてをこしゝほぎごとは、斯る嬉しき心は奥を流れ出でて、斯る苦しき筆にうつされしあるか、

かゝる程に、丸重の花の都は風はやみ、青山のほとり雲のゆきゝの常あふずして、長くも國母陛下は廣寒宮裡へ神去り給ひぬ、あはれ身は病蓐に打伏して母のはゝなきをうあち、今やもくりなくも國母陛下の御登仙に逢ひて、却ておのが身の全きを恨める心の中やいかなりけむ、斯くていつしか民草が涙の雲もうたちぎ、捧げまつりし華縵の梅もあやあく散りはてゝ、櫻花やうやく笑みそむる頃とはありたれど、君が病は尙ほ日はる所あしといへり、すでにして落花新緑人は皆衣を更ふるに至りたれど、君が病はなほ舊狀を更へずといへり、かくていつしか七旬は休暇も過ぎ、稼禾すでに熟して母は新穀を食むに至りたれど、君が病はなほもとの儘なりといへり、桐は一葉に秋立ちて、風聲露色君が一周の秋を諗ぐるに至りたれど、君が病はなほ恢然たりといへり、あゝ天公いつまでか此人を弄び此人を苦めんとはする、奪はゞ速に奪へ、救はゞ速に救へ、何ぞ惡戯をなすことのかく甚しきや、

明くればことし戊戌の年なり、新年とはいへど、英照皇太后の周年の御喪に際し奉りたれば、世はなべて新年の賀狀をひかへぬ、さればにや君もおあさゞりき、ろくて花はいつしか去年の香に匂ひ、谷の戸の鶯時を得顏になのり出づる頃とはなりぬれど、君が病はあほもゝとの如くあり、

いべり、思ひのへせば君が金城に病みてより、裘褐を更ふることはや三たびにありぬ、されどなほのくの如しと云へば、君が病すでに膏肓に入りて遂に醫すべからざるか、さりあがふ國手匙を投じて一生を得たる人世なほ少なからずといへば、いつか復た君が健顏に接する日もあらんかと、さは云へ恃みをかけしものを、思ひきや卯月の空に霹靂して、もくりなくも君が長逝の音に接せんとは、吾等は唯膰のふぬ香華料を贈りて一片の吊意を表しぬ、嗚呼人世無常人は空しく風前の花と散りぬ、あはれ人はいづくより來りてそもいづくにか去る、父母に呼ばれて假りに來れるか、歸る所はこれ故郷なるか、青山未だ老えず綠色猶色をかへざるに、行末を契りし友は今や既に去て、我獨り數々として浮世の峻坂に彳亍す、豈涙なからんと欲するも得んや、君は性豪にして氣銳く、悲歌高唫常に田騈の天口を振うて世道の非を慨嘆せり、君は手惡來の力なりきと雖ども、長脚の疾きこと能く蜚廉を凌げり、然るに旻天無情君に健全の躰を藉さず、健全の想を肥するに由なく、芳蘭夭折して今や空しく遺香を留むるのみ、嗚呼壯士去て今や那邊にかある、君が音容宛然として猶耳目に存ずれども、我は再び此世に在て君が警咳に接するを得ざるなり、世不死の仙丹ありといふ眞か、世反魂の名香ありといふ僞か、耆婆扁鵲固より常に在らず、我も病み君も病めり、而して君は夭折して我は存せ、嗟猗人世の果敢なきこと一にこゝに至れるか、我れ桑梓の地を辭す既に三年を經たれども、吳下の阿蒙猶依然として舊態を改めざるに、救世を契りし友は今や去て在らず、思ひあまりて眺むれば、秋天の弦月氷よりも冷かに、白露短袖に落ちておのづからふ聲あるに、折しも園裡に微吟する易水の歌、彼れも故人を忍ぶなからむ、

水莖にかきはやれどもつきせざる思ひのほどはくみて知らなむ　（完）

高根れ月

花廼舍　吹雪

雨霰雪氷其名ころ異なれ落ては同ト谷川れ水に隔てのいうであるべきまして心を種とせる俳句の道分のゆる麓の路を異にするのみ高ねの月をたゝえん心に何のとなるふしゅあふんさるを我は正風われは新派と城壁をかためて敵視する奴原の心のせまさ粟粒の中をくりぬき城たてゝ其窓にてよむ暦れ字も物の數かはとがもはれて笑止千萬なるのし

心もと形なし只これを容るゝの器に從ふこと水れ如しされば君が器は蕪村形我の好は桃青好みいでや休れ暇を期とし秘藏の器の虫干せん（吹）

うつすともあくてうつるや水の月　吹雪

小家二軒庄屋はやふのかあたなり　花湖

取り出て小裳に人をトれふかあ　同

生醉れ禮者を見れば大道を横筋違に春は來にけり立さまに雨にやれたる禍も初日拜むに便なりける紙窓の下に汲むや屠蘇くさくて酒に如かさるを憤り我市井無爲の徒慷慨とやら畏ろしの業は品にあふねと蘆間れ蟹のさるにても我俳壇の兩派舊來の形勢寒村避地愚智蒙昧の輩の肩衣の紋處四か爪らしく年頭の回禮舊習之れ墨守する愚さよと罵れが蟹ゥ這ふ横文字の書生がちりたりとて青書生奴新を希ひ奇をてらひ洋服華奢に綠門をくゝり祖先の誤を等閑視して〜たり顔なる無法物と應じねたみ嘲りの極みさては陣鐘陣太鼓吶喊射擊れ大接戰遂に今敵すべかゞざるを知りてか壘を固めて出でず徒に正風とのやの數疏山砦の繁みに翻り麓十里の野之れを圍むの露營點々詩神につくす至誠はさる事ながら彼亡ひされは是揚ふずといふにあふぬを度量れ狹さよ實にや僕人が居者は社禮の守行者は藕絲の僕亦可あり必ずしも居者を罪〜行者を儺とすべけんや吹雪の君が雨霰うなり勝眼ゝ開き大久保西郷立たんとそこや（花）

歳旦に男子あはたる俳かい師　花湖

畏り主相のもんに松も無し　同

豐年の〜るしをつむの春の雪　吹雪

梅さくや籬の雪はふきたまり　同

花湖の君が左傳の講義もさる事ながら五月の鯉にもまして腸あき奴原口を酸くしての説法も聲に音樂まして清國征服問もなぐしてはや南京米のやつ介に預りたる今日此頃腹をへふすは此方の損害勞して功あければ傘屋の丁稚のそーりも恥かし古びたれども温故知新を經緯として人は人也我は我と澄して見ればそれまでなめれど首陽山に餓死する事も文明開化の此頃には愚の到り鈍の骨頂あまり賞嘆すべき事にもあるまゝとやせんのくやあらんと迷ひそめては三保の松原に羽衣を奪はれたる天人にもいやまさりたる心の中せましと笑はん人は笑へをのしとれもはん人はおもへさりながら君がのたまふ如くに慷慨とやふは品にもあらねば吹初めん春風に行衛を任し柳れ糸の逆はぬあたりをまねばんもまた一興ありかし（吹）

長土堤や春は柳れ獨り占　吹雪

さつはりと晴るゝ裾野や雉子の聲　同

野末なり淡雪溜まる馬の骨　花湖

鳴り渡たる除夜の鐘れ音肌寒し神よなとて余を責め給ふ實に我は誓りきあふず誓ひしことをせざりきされどそはなすべき機れあふざりければ也我とても初よりおし得べき心算おくして誓ふ事をなさんやされど神天は我に機を與へざりき即ち我業は破れ目的は空しうなりける今我誓を果さゞりしを罪おりとて責む神よおもん見れば罪ぞ天にあふずやあふす神みづからの過おらむ滔々眼無き奴輩のかひなの叫茲に革まりて更に悠々あはれ〳〵（花）

叅侯は三の家老をはしめうお　花湖

屠蘇に負けて詩を課ふれし右大將　同

得意の本音を吹のれ侯もれ哉いざ我とても唐人の大法螺は心の外正札付の處せめては氣燄五百丈とおもひ立ちても轉せる瓢胸中わはれ無一物なるをいうにせん一簞の食に餓たる腹に瘠我慢を張りし顔回ならねと心自ふ閑なりと高楊枝を使ひて見れど自分免許のかおしさは誰とて敬する人もなし世は擧て混濁おれと我ひとり清めるは胸中空くて濁ふん種のなければにや

さても心もかめ極也我は何の爲に此世に生れし否われのみなふド皆人は如何おれば命をむさぼり貴を爭ふ食て寢て死す死して名を殘すとはそも何等の言ぞや人生五十功なきを耻とは地球てふ小天地に住んで大海しらずの唐人の寢言何の爲と目的おしに生れたる動物功のあるべき理やはあるあてもなきに生れあてもなき世渡りに大騷をなすむしろ死するにしかず生れざるにしうずとは餘程氣取りたる筈の語なめれどまだ覺り足ふぬ所あるにやあちん（吹）

行く川れ流れあぶおし五月雨　吹雪

川越て消ゆるなごりやとぶ螢　同

死するに如かざるに死せず生れざるに如かざるに生れ出でたるわれ人何れ爲めに生れしおぞは云はずものおあふず生れいでざるきわに考研そべき事にてろ然るにてもおほ疑うの人あふばわれ人は神聖の愛戀の妙典をすゝめんとぞ思ふいざ（花）

賣初の才三勞はるおおまうお　花湖

わか思すみれによせて歌はんろ　同

月桂冠

獨逸の詩をうちにも無き翻約とのや爲めなれとそれかし等か矢先にのけ奉るも畏ろしの御大將されは御名ははゝかりて只一千八百十三年普魯西亞のた名もはしき黑衣軍れ群兵雞くんの一鶴の聲とのみ

千木花樵人（未定稿）

一　ふし

立てよいさ國民あはれ、狼烟はし今そ揚れる、きら〳〵と自由の燄、北辰の影うする

まて、おほ空に　輝きわたる、楯むらふ　醜のゑみしの、胸痛く　怨のやむは、とし月を　泣きてきたへし、はきたちの　束をも通せ、たてよいさ　くにたみあはれ、狼烟はし　今そ揚れる、かきつ田も　川添を田も、八束穂の　ほ波普ねし、いそしみて　勉めしまりて、收獲を　怠ないめ、もく秋の　あすをも待たて、ふきと吹く　あからしま風、夜の雨も　後めたきに、世にのたき　奇しき花は、くも迷ふ　劍の林、風さわく　弓はつの森れ、おく深く　匂ふと云へり、かい探る　のひな斑に、あさりゆく　はきを叢濃に、染むわけの　赤き心を、難にはにの　よしやむくふは、醜草の　葉末の露と、散ぬとも　結ひ止めて、打連れて　たとる人等の、安らけく　迷はさるかに、暗の夜れ　道の桑と、燈と　成りてものもあ、汚れたる　國土をあらす、生り出しあれの敵國を、祖先等ら　うまいの床を、傳來し　汝か血に、もか〳〵と　すゝきてしかあ。

二　ふし

ときしふか　淀みにうゐふ、水泡の　果はの慾か、ひるまをも　待たて消ぬる、朝顔の　露の譽ら、求めんれ　戰にあふす、畏しれ　ちみ罔兩ら、情無の　掌ゆ我、信仰と　德と權利を、慣はしと　誠をえんの、痛ましの　あはれみ軍、汝ら老は　醒よと光ひ、毀れ舍は　敵の影忌み、汝か幼は　恥と血に泣く。

三　ふし

のきくらし　八百霧滿かとり、山とよむ　樵夫ら斧れ、音絶へて　鳥さへ泣かす、あ引する　あまの聲せて、逆浪たり　島をのゝのみ、打寄する　浦風かなし、立迷ふ　不時れ煙に、まさ〳〵と　日はくれはとり、紋機織　をさあけ捨て、縦糸の　立てよ工匠等、袖垣に　玉捲芭蕉、玉とけて　五尺のみとり、のきゝ蓋ふ　庭の築山、楠の　ふすまのをしら、欄に　袖うち垂れて、妹脊の　立てるうてあも、財寶も　末の松山、藤葛　若紫の、元ゆひの　ゆるへは亂る、並松の八十代をのけて、愈高く　み旗なひけり、汚れた祖先の國土、すゝけよの　神のみよさし、永久の　自由のみ影、さへきるや　天れ岩戸を、希くは　くたさても哉。

四　ふし

小女等の　何を喞つか、をみな等れ　何をさは泣く、山行かは　草蒸す屍、額には　やをは立とも　脊には　矢をは負はしと、雄心の　とち打連れて、ふゝ笑みて　屍踏むとき、海行かは　みつくらはね、月影れ　さそに障れは、あまのかる　藻に住む虫の、我のふと　太刀とり佩きて、うたひつゝ　鯨波揚くるとき、朝には　うけらふ駒に、日の影も　ちりに曇ふひ、夕には　飛ふ彈丸しけく、うきくふし　降來る雪と、うち亂れ　家も忘れて、男等の　爭ふはしに、益荒夫と生れさりしを、汝はしも　なけくとやわの、愛らしの　汝うこゝろよ、矢はつきて　太刀はたくたけ、赤に染む　勇士の肌、柔かに　のい抱くかに、素直ある　情の腕を、風冴もる、雪の野營の、夜半を泣く　勇士の肌、温かに　あひせ掛らに、盡のての　愛の泉を、眞心の　祈禱のうちに、信仰の　妙の勝利を、おは神は　汝に惠めり。

五　ふし

あみしらか　兼て釀みたる、八塩折の　酒を假皮に、槽丼へは　槽を枕に、うまいねし　奇しき

力を、さめんとに　日は日もすから、古ゆ　こたみにつかへ、彌高に　石疊上げ、彌深に　水せきたゝへ、きつのしゝ　之れの國土、ひとひらの　楯もなにせむ、ち萬の　敵も何そと、世々久に、云ひ來し民れ、み孫われ　よき名の匂、益々に　かをらさんりに、けうふかに　折れおれて、敵の城　くゐはらゝおす、腹鑁の　軍の守護、地にふし　天にあふきて、恐れなき　正義れ　いくさ、天うける　み使として、マルティル　呼ふへのりけり、知召す　夫れみおとの、勝軍　守ふへくも、みまのりし　皇后ルキゼイ、陣頭に　旗なひこして、われ人を　導くへくも、幽溟の　フキリデナンド、うつゝ世に　魂かへるかに、夜もすのら　祈れ汝ころ。

六　ふし

のくゝこそ　神もたすけめ、立迷ふ　煙はあひき、閉込めし　き霧うすれて、晒さず　旭うらゝに、花笑ひ　草鮮りに、其のうみの　弓矢のくみて、時まねく　行かひ上劍、武夫の　影さへ見えず、さやけりし　鼓の音は、松かせれ　調にかよふ、死せよいさゝに民あはれ、露ゝもと　命きえたる、汝か屍　岡山をなし、汝か血潮　海しなすとも、其か山に　桂はな咲き、長へに　匂へふあり、其の海に　眞珠のゝやき、浦々を　照すへちなり　千載の下。

五十鈴れ流

湖舟生

神さび立てる大宮の　仰げば高き眞木柱
宮居久しくありぬちゝ　我民草の心根を
一つにこめて潔く

いと清らけく美はしく

ゆたけき光さきざて、
朝日の海を出づるとき
平和と愛と樂と
我日の本をとこしへに
護り玉はるゝるしとて
輝きまさる空の色

寂しき光殘しつゝ
夕日の山に隱るとき
嘆き頻ひ苦しみの
猛夫れ胸もさけめべき
憂の姿現はして
深く沈める地の色

高天原に神集ひ
集ひ玉ひし春なれや
それ大神れみことあり
瑞穗れ國をしろしめす
天つ日嗣ぞうぎりおき

あゝとことはの風れ音
杉の梢におとづれて
結ばぬ夢を破る時
國の礎いや堅く
たけり狂ひし太波に
そこなはれにし人や誰

影を此世にとめおきて
不滅の魂は天の原
照る日の光りわたつみれ
波の底をも照もべく

昔を問へば八百萬

偏ねき光り山奥の
名なき草にも宿るべく

つちをくゞりてあめにぬけ
天にあまりて地に入る
このすかの光り星は色
あてなる婆花は野邊
いづくのはてゝいつの世の
神の御靈のなかるべき

たゞさす朝日まにうけて
底つ岩根にふとしりし

その宮柱もるぎおく
日照夕日を背に浴びて
ひぎたゝしりてまし〳〵き
高天の原はいや遠し

みたまのふもの春に逢ふ
大和島根はあをひとぐさ
心の奥にひそみたる
思ひは何ぞ五十鈴川
つきぬ流れは滔々と
神代の昔ながらにて

をりにふれて

紫影

江に臨む擔の片枝紅葉してさゞ波よる夕日影ゝあ
櫻散る櫻の中を妻の手にひかれてありくあはれ琵琶法師
うなゐふが盥の舟に棹してさやまの池に菱を採りくふ

物思ひ物思ひつゝゆく我を尾花の袖の招きこそすれ
大空に漂ふ雲のとまるべきはてやこの身のよすがなるふむ

春興雑吟

諸

三

若草の　もゆる野澤の　うす緑　春の淺さゞ　色に見ゆける　高橋富兄
青柳は　糸にもありぬ　綻びし　旅のゝろもよ　誰かぬはまし　花廼舍正義
のどけさの　限りをうたふ　鶯は　聲こそ春は　いのちなりけれ　瑞乃舍藤浪
菅原の　神のみたまも　ゆるしたべ　梅さくころの　心ゆるびは　同
常盤ある　松にまじりて　さく花は　手を携はり　妹とこそ見め　同

田家烟

君の代にあへる御民の喜ひは立つる烟に見はれにけり　同
御民等かあひく心も朝けたく里のけふりと立昇るふん　同
君か代は長田の里に立つ烟空につゝきて山にたゝひく　同
村雀かと田に聲もにさはひてゆたけさしるく立煙かな　同
とゝろえて田面の里に立つ煙靜けさ御代の姿あるふん　同
山田もる伏屋の烟數そひてゆたかになひく御代は春哉　同
大君のふりき惠にたちなれてけふり賑ふ小山田のさと　香滿多定郎
　　ひらさき生

同　細煙たつらの庵も君ゝ代は里にあふれて見え渡るゝな　花廼舍正義
同　打靡く田面の里の煙にも民ゆたゝなる御代は知らるゝ
新年天象　大空の星はうすれて新玉の年や立ちけん峯のよこくも
新年雪　來る年をむかふる門の呉竹にたのしき節も積るしゝ雪
門松　門毎にたてならへつゝ市町は一夜に成れる千代の松原
梅　綾衣も賤がたもとも〳〵たてすて匂や梅の情なゝまし
待鶯　春立つといふよりまてと鶯の初音は里は名のみあり鳧　愛花生
寒稽古　肩先を斬りこされつとおとろきてさむれは寒し窓もるゝ風
同　太刀とりて袴のそはをかゝけつゝ見やれは〳〵ふむ庭の白雪
同　斬り伏せて家路に向ふ太刀の柄に霰たはしるありあけの空

春日雜詠

初鶯　呉竹にねくらしめたる鶯のふゝ面白きけさの初聲　香滿多定郎
子日松　二葉なるねの日の松をひきろへてけふを千とせの始と思はん

山霞（歌文會第一例會）

朝ほらけ山の霞の色こきは豐けきしはの烟なるらん　市郎

春の色夜の間の雨に立そめてひえの山蔭霞うきたつ　蟹丸
野に出て外山ふりさけ見渡せは小松か枝に霞棚引く　美輔
ほの〳〵と霞を出る遠方の山の端〳〵ろし横雲のそら　義雄
見渡せは霞の海の果もあく谷間の木々はみるめ也鳧　雅雄
霞めりと眺る方の山賤は此方をも亦さこそ見るふめ　正義
長閑なる春にあふみの鏡山見る面影は霞みけるかな　顯吉
しゝ山はなへて緑の春の色にはちて霞に立籠りけん　莊二
山の端も見えぬ計りに撫初めてかゝる霞や天の羽衣　定郎
見渡しの百重の山にいつとなく棚引き續く夕霞かな　佐美
足引の深山の奥の賤家もはるのめくみに霞そめけり　幸長
朝ほらけ遠山眉の色淺く霞みにけりな春〳〵たてれは　茂知
山の端は雪の衣をぬきすてゝ霞の裳裾引初めてけり　秀知
いつしかと棚引く山の霞より春の心は見えそめに鳧　守一
佐保姫の豐のに立てる袖の内に包める玉や白根なるらん　富兄

春季雜詠

高砂の島や椰子樹は初日の出　紫影

竹垣に古足袋ほせり梅のはな　　花牌

花牌して歸れば月に雪がふる　　跡

初て北國に年を送り迎へて　　柳

初雪も三尺ふつてすさまじき

案じ得たり火閣に屠蘇を飲むことを

遣羽子の剃尼あるゝ御落胤　　花　樵

狩人の矢に齒朶多き輪飾す　　狩人の矢に齒朶多き輪飾す

誤てり下向は右よあげ雲雀　　霞　生

花散れど寂然として墓の面　　花散れど寂然として墓の面

若水やつるべに落る星のかげ　　若水やつるべに落る星のかげ

雜煮にる煙豐かなり百戸村　　白　禹

梅咲いて若侍の遠乘す　　梅咲いて若侍の遠乘す

一年の計此にあり今朝の屠蘇　　幡　山

弟は食ひ後れたる雜煮ゝな　　弟は食ひ後れたる雜煮ゝな

梅が香や朱塗の社いかめしき　　廉　郎

京に出て唯夢に聞く呼子鳥　　潮　谷

臼の蔭に君が代を聞く長閑あり

春雨や小扈從爪に紅をさす

盛年不重來　一日難再晨　及時當勉勵　歲月不待人

陶淵明

藺相如論

村上函峰

立非常之大節者。義理曲直。素辨于胸中。而後功加天下矣。苟無素定之見。奮勇決死。以僥倖于萬一。安克濟哉。藺相如以一介使。而不屈强秦。完趙璧。是所謂能立非常之大節者矣。而世徒以勇稱之謬矣。夫秦乘戰勝之勢。肆虎狼之威。六國之君。皆駭汗脇息。今日割地求和。明日入質乞降。而尚恐不得秦之歡心。相如奉一璧。入虎狼之秦。當此時。今日之相如。不爲他日之荊軻者幾希矣。而相如若涉無人之廷。奮勇叱咤而不顧。是豈非有素定之見。而能如此哉。蓋秦之欲璧也。其意不在璧。而在窺趙之强弱。趙强矣。失璧何患。趙弱矣。得璧何裨。且夫强弱勢也。曲直理也。理所存。則勢屈之。勢所在。則理勝之。秦以城求璧。而吾不許。則曲在吾矣。吾與璧。而彼不與城。則曲在彼矣。彼所恃者勢也。吾所恃者理也。吾何畏彼哉。是相如胸中之所素定。故能入虎狼之秦。而若涉無人之廷。奮勇叱咤而不顧。使秦王知趙之不可輕。理之不可奪。其功豈不偉哉。夫相如一爲之。而三晉作其委靡潰敗之氣。而趙亦從敗秦兵數矣。微相如。山東諸侯。馳車馬。奉玉帛。奔走關中。秦之帝天下。不待始皇也。然則一璧之得失。不唯爲

趙。亦爲山東諸侯也。孟子曰。吾善養浩然之氣。是氣也至大至剛。以直養塞乎天地之間。相如之不屈强秦。亦以直養者歟。

福善禍淫論

明　石華陵

天可必乎。善者不必得福。淫者不必得禍。天不可必乎。善者必得福。淫者必得禍。夫禍福之於人。或得或不得。然則果何所取則哉。請試論之。（高木習齋云。一入手便作如許搖動。生出姿態。）今夫嵩岱岷峨之山。崢嶸崎嶇。磅礴而上。或高或低。如無定形然。而由其地勢。以審山脈。莫不西奔而向崑崙也。江淮河漢之水。蜿蜒蟠虵。浩湯而下。一南一北。如無定方然。而由其地勢。以察水脈。莫不東流而歸大海也。蓋善也者崑崙也。天下之福向焉。淫也者大海也。天下之禍歸焉。然而世人不察。見其一不幸。乃曰。善者未必得福也。見其一幸。乃曰。淫者未必得禍也。是猶指山之一峰一巒曰。山不獨西奔而已。指水之一曲一巒曰。水不獨東流而已。豈理哉。（習齋云。此節正喻淫錯。絕巧文情。骨法自子輿氏暨昌黎氏來。又云。以上虛論二段。文勢甚奏。）昔者殷王滅夏。告萬邦曰。天道福善禍淫。彼桀之暴惡。爲天下之戮。是所謂禍淫。而不得以其逸游宴樂爲福也。湯之仁德。有天下之富。是所謂福善。而不得以其辛勤勞苦爲禍也。盜跖之壽似福。而人皆曰。桀紂盜跖矣。伯夷之餓似禍。而人皆曰。湯武伯夷矣。然則桀與湯。跖與伯夷。孰禍孰福。必有辨矣。（習齋云。議論入實。總理周匝。一篇精神。全在此段。）夫修天道。譬猶治水。善治水者。必能測地高下。順性自然。而疏通之。故用力少。而受利也遠。有一人奮曰。水易治耳。徒崇其隄防。以行之於高阜。以謂我受利廣矣。不知水滂一至。則隄壞防決。而人畜共亡。故其用力彌多。則其弊緩而害益大。世常不察于此。喜弊之緩。以爲隄防亦無害矣。（習齋云。又肯得此一段譬喻。文章愈清然。而其中自見至理。妙。）嗚呼見小而忘大慮。近而遺遠。欲以言天道。難哉。（習齋云。結末法度甚謹嚴。筆力亦矯々。）

高木習齋評。文字疎宕有氣。

又評。此種題最是難脫道學先生之口吻。今明兄澹々入譬喻。通篇絕不見道學先生之口吻。却至理存焉。非老於文字者。安能至此。余三誦後。不覺頭伏至于地也。

有井進齋評。入山水二喻。用縱橫跌宕之筆。臨末淡然一收。似不費力文有變化。

加藤櫻老評。絕大議論。絕好文字。而筆鋒之銳健。酷肖老泉。

木原老谷評。瀟々洒々。呵成一淡文字。先生胸中快豁可想也。

擬大塔王獄中上書

荒岳

臣以不肖之身辱庶孽之名嘗見棄山野與乞食之徒伍宜修法善身以終性命是卽臣之分也然承久以來朝廷失政東夷擅權臣憤之久矣加之元弘之初東人入京將易天位遷皇居於遠裔其急若燒眉然當是之時豈無患臣義士乎然有葭莩之親而當元帥之任恢復張皇綱以致天誅者舍臣其誰也故幡然勵志脫袈裟秉鉞衽草枕甲備嘗艱苦而臣不敢墜志唱義召募勇士運謀誘納良將於是勤王之師響應景從遂誅數世之仇致一統之陛下今復天位者是誰之績也臣已功名遂豈敢貪祿位哉欲復歸山野久矣而未敢歸者有所憂慮也臣聞哲人見於未萌庸夫暗於成事能見於未萌逆爲之備則災害自消禍亂不生是明君聖主之所以安天下也而見於未萌深計遠慮者自庸夫觀之徒以爲妖言莫之能用反罪其人比干剖心於

殷子胥賜劍於吳皆羅此禍也臣觀古之君人者孰欲亂其國亡其身乎而殺戮忠良自取亂亡爲天下所笑何其愚也而其資禀則非必愚爲嬖寵所蔽其明也若晉獻楚平可以見矣以遠視深察方別邪正辨識忠否人君之急務也陛下幸留意焉臣竊謂高氏兄弟高時之姻戚不可赦者也彼自知其不可逭雖逆戟助王師猶功罪不足相購乃厚莒苴諂事左右以故得比元功諸將而卒懷野心與陛下爭天下者必彼兄弟矣臣獨喟難謂雖高時伏誅高氏猶有是前門驅虎後門進狼者也故曩請斬之而爲左右護佑之不見允是臣之所憂慮也是以彼以臣爲仇結納左右相爲表裏潛求臣之短浸潤搆讒唯陷臣是務是臣之所以爲申生子建也申生建使其父負殺子之名是死有餘罪者也臣雖不愛一死亦畏餘罪幸使臣得脫囹圄即復歸山野放言不復干世事矣聖主憐察臣精誠伸其冤結死且不朽昧死敢上言

新年作　金井秋蘋

今朝三十二春風。吳下誰知舊阿蒙。事業多年空畫虎。文章末技尚彫蟲。梅花和夢吟邊白。酒氣如潮醉處紅。更把離騷窓底讀。依然傲骨向人雄。

附

逗子客舍邂逅金井秋蘋見似其新年作嘆賞不能止次韻以贈　東久世竹亭

開年淑氣挹光風。多爾新詩善啓蒙。天許吾徒以文字。劫餘何物不沙蟲。梅花籬落星微白。水榭欄干日乍紅。縷月裁雲三百首。傳家詞筆自豪雄。

秋蘋爲老友金洞冢子末句故及

己亥新年　君峰義

時事唯應捫蝨談。窮通有命又何貪。殘餘陳編纔存志。春風笑迎二十三。

同

律轉天門斗柄東。暖回池面泻水融。誰知孤客十年恨。春度春歸逆旅中。

同

星回新曆日。寅正斗柄東。旭日晴更好。五雲淑氣沖。竿頭日旗色。門前松竹風。他鄉雖異俗。流風自相同。屠蘇一杯酒。辛盤春意通。客途非無感。百憂如氷融。況生陶虞際。優游天地中。棲息已如此。不須羨三公。所恨唯一志。十年未酬功。故鄉雙親在。何以奉養充。反哺志不遂。三枝禮更空。雙親翻哺我。中懷恨何窮。以人不如鳥。反省愧此躬。皆々窓外鳥。飛來影映櫳。

元旦　蜷川鶴外

窓外柳條籠淡烟。眼中景物已融然。爐頭三盞椒花酒。私祝今年勝去年。

新春閑居

紅日三竿四海清。窓前喜鵲報新晴。門無賀客閑揮筆。目怪雲烟腕底生。

己亥元旦

櫻岡春太郎

朝旭烱耀曙光淳。曆改乾坤氣象新。東海煙霞籠戶舉。南山草木抽芽均。寓邦重歲交情睦。皇國追年德化臻。淑酒三杯酌先祝。無疆聖壽太平春。

金鷄三唱曉明催。八十餘州瑞氣開。曙光曈曨初旭到。人情和懿麗春回。光華皎潔千峰雪。香蕋芳芬萬樹梅。堪喜蒼生浴皇澤。屠蘇醉裡句新裁。

歲暮

逼迫光陰臘景開。掃煤舂餅太忙催。且呼活火焚詩去。或向清樽貯酒來。荒砌風寒月光凍。空山雪白雁聲哀。一團和氣先春合。兒女弄球歌幾回。

一事無成歲已窮。依然宿念恨憂空。文章聊學風流慰。志氣遙衝星斗雄。庭竹聲生飛雪急。瓶梅春勳暗香通。堪憐政客輕邦憲。連制民權擬大功。

微藤田東湖飄兮歌賦櫻兮歌

石田竹溪

櫻兮櫻兮吾愛汝。汝曾熟知三郎忠。追隨西陲不改節。一樹嚴然護行宮。夜深樹上十字句。墨痕馥郁奏偉功。櫻兮櫻兮吾愛汝。汝曾慕兮源公雄。勿來關外夕陽裏。落花繽紛點征驄。添得詞華花逾潔。餘香薰鎧向關東。櫻兮櫻兮吾愛汝。方今廟堂天色濛。三郎精忠誰復踵。源公雄圖何匆匆。不須桃李爛熳美。只合悠然伴詩翁。櫻兮櫻兮吾愛汝。汝能守節凌雪風。芳烈千古護神國。清標卓卓與我同。汝欲開時吾欲達。汝欲萎時吾亦窮。一榮一落吾畏何畏。從容獨樂詩酒中。

歲晚感慨

龍山梅塢

年華逝水素心違。歎息浮雲世態非。日暮停雲懷舊雨。閑中清籟入禪機。深霜一路星光灼。落月寒山樹影稀。兀座疎燈惟伴我。梵經誦罷思依々。

欲拂舊愁斟濁醪。朧朦醉態意偏豪。鯨吞灑海風濤怒。氷綴梅花雪月高。慷慨有時歌易水。呻吟無倡讀離騷。空餘俠骨還難奈。試拭床頭日本刀。

歷來世路太嶙峋。又向窮陰感慨頻。鶴子梅妻他夜夢。軍持銅鉢未歸人。月光鏡似穿窓淨。風勢如濤觸樹瞋。坐樹寒燈眠不得。離魂空愴故鄉親。

元旦書事

晴曦赫八荒。臣奉祝堯觴。鶯語迎新滑。梅花隔臘香。明詩羞飽暖。閱曆卜豐穰。更喜雙親健。清晨獻壽長。

一天晴景新。四海入王春。水暖芹香遠。風輕鳥語頻。身閑何羨富。心澹且忘貧。幸值休明世。無羞皷腹民。

冬日雜詠

北風飛葉撲欄干。液雨蕭蕭滴屋端。獨坐沉吟凛瓏骨。庭前古槍不堪寒。

一窓踈影老梧桐。心事轉清寒雨中。並座圍爐春盎盎。不知半夜透肌風。

詩伴相携路不迷。孤村之北小溪西。冬晴却勝春晴好。橘綠橙黃入品題。

西窓忽見夕暉移。方是吟人思句時。猶喜小園秋意在。兩三殘菊傍疎籬。
四鄰人定夜荒涼。獵獵北風吹草堂。窓外雁聲驚客夢。千山萬壑月如霜。

× × × × × × × × ×
袖ぴちてむすびし水のこほれるを　　實
春立つけふの風やとくらむ　　之
× × × × × × × × × ×

雜報

貞宮殿下御薨去

かなしやあ、春とは云へど、名のみにて、無情のみ雪は、いと高く、降り積りて、畏くも竹の御園生の、まだ二葉なる、なよ竹を折りて、上はかゝあき雲の上より、下はちよろづは民草まで、押なべてなげきの霧に、立ちこめたるぞ、うたてなさけなき限ある。いたまゝきかも、このなしきのも、貞宮殿下の、御いたづきまし〳〵て、相州酒匂の御館に、引こもらせ給ひぬと聞きしは、昨日の樣にあそかはゆるに、ひたすら御平癒の程を、祈り奉りし甲斐もなく、俄のに御重體とならせ給ひて、十二日青山なる御所に、還御あらせられ、同おき夜やがてかむ上りましぬ、あまりあへなのりし御事に、われ等臣民の胸はつぶれ、袖は涙せきあへぬに、越えて十七日、豐島の岡をば常宮と定めまつりて、神あがらしつまりましぬ、われ等國民が、殿下の御生ささを、松のみどりの、いやふゝく、千代萬代に榮えさせ給へゝしと、常に祈りまゐらせしも、今はゝやむりしの夢と、なりぬるぞはかなき。上下のかなしみは、しるすも限なし、さはも、別けて雲の上の御なげきを推しはゝり奉るに、腸の千々にちぎるゝ心地して、絶間なき涙の露に、空しく袖をしぼるにあむ。

嗚呼新年

秒は秒を迎へ分は分を送り、一日は去りて落花の如く二日は去りて流水の如く、永劫無窮なる坤輿は一定の規律れ下に轉展して須臾も止まらず、人は此間に棲息して生を蜉蝣に寄す、昨紅顏を誇れるの青袗も一度覺むれば楊州の夢果敢なく、今は秋風に白髮を喞つの悔有るに至らん。去れり明治三十一年は夢の如くにして逝矣、今や吾曹は所謂芽出度己亥の新春を迎へぬ、然れども山は依然として高く、水は漾々として舊の如く流る、杲々たる旭日は醫王山上に輝く事常の如く、疎霞簾を撲つ常の如く、荒陵水涸るゝ事常れ如く、雲は無心に亙り雪は無情に飛ぶ、唯だ滾々たる六街に車馬の塵繁く、市人の嬉々狂奔せるを見るのみ、嗚呼斯の如きの新年。

世は死なる最大勢力あり、幾億萬の人類を捕へて此と墓中に運ぶ、生有る者必ず其箝制を受く、王侯貴人も免るゝ能はざるあり、朝に祥雲鬚き瑞霞相映ずるも、夕には枯楊影淡く、暮風悲むの幽境を現出す、樂の中には苦有り、春有りて秋此れに次ぐ、昔『門松は冥途の旅の一里塚』と謠ひつゝ、髑髏を杖頭に懸けて世を警めし一休禪師は、實に此間れ眞理を闡明して餘裕あり、亦彼の陳子昂が『前不見古人後不見來者念天地

之悠々』と唄ひし如き、蘇子が赤壁の下に禁ずべからざるれ感慨を泄らせし如き、皆這般一面の眞理を吾人に教へ尽したる者と曰はざるべからず、然るに滔々たる世俗は現在に熱狂し、過去を顧みず未來を想はず、徒に樂しみ徒らに憂ひ、全然夢裡に其生涯を終ゆ、嗚呼人世は果して斯の如く茫漠たるか。

戊は去れり亥は來れり、來り一歳も又去りし歳の如くに夢と消へ逝かん、其の去らざる間に巧に此れを利用せよ、巧に此れを保續せよ、此の如くにして精勵屈する無ければ、死屍風塵と化するも、尚ほ渠れは史上に生存するを得て、其名や其業や宇宙と無窮を競ふを得るに至らん、此の如くにして人生は始めて茫漠たるを免かるを得べく、眞個に玉暦の改まるを祝もるを得べし。

世は餅蘇の間に新春を祝し、惠風に聖代を謳歌するの間、敢て諂劣の辭を陳する所以の者は、又來ん春を諸君と共に、眞個に祝賀せんと欲して なり、恭賀せんと欲してなり。

迎新年

混沌たる者は去て清和ある者は來れり、瑞雲千代の城を罩めて、民は豐かに、國安らけく、和風萬里鳳紀爰に新たなり、慶賀何ぞ罄んや、噫新年なる哉、新なる哉、是の無事快適の清福に從容するを得る、亦國家太平の餘澤と云はざるべからず、謹で呼唱す、

陛下萬歳

帝國萬歳

山は高く千秋の緑濃かに、水は澄んで清益清に、習々たる東風春を報ドて梅玉先咲ふ、庶民は此聖代の祥氣に鼓腹して皇德を謳歌す、吾人亦年の新たなると共に、本會の彌盛に諸士の愈健ならんを、三呼せずんばあらず。

本校萬歳

本會萬歳

此慶すべき元旦、祝すべき正朝、我校亦年賀式を行へり、校長れ祝詞學生の答辭等あり、終つて各太平を唱ひて散ず。

神機一轉

從來北條校長れ職員學生一般を集めて告諭せらるゝや、常に、學生の本分を確守すべきこと、授業時間の尊重すべきこと等、表面の規律にありて、之が爲には、師弟の情誼を厚くし、校風の振作を助くべき裏面の關係の如き、擧て之を犧牲とするも惜まざるが如くなりき、學校としては表面の規律の重すべきや固より論無し、然れども、單に嚴肅なる規律を以て青年血氣の學生を束縛し、毫も和氣藹々たる春風に浴すること無のらしむるが如きは、反動或は意外の邊に顯はれ、爲に或は好なしからざる結果を見るが如きこと無しとせず、是れ默々の間吾人等の竊に杞憂せる所なりき、然るに幸にも如此は全く吾人群雀の杞憂に過ぎずして、大鵬の胸中別に神算あり、先づ表面の規律を正し近時漸く其緒に就くを見るや、年と共に方向を一轉し、裏面の整理に着手せられたり、一月十四日校長は例の如く職員學生一般を靜勝館に集め、一場の告諭を與へられぬ、其主旨に曰く、現今校内に存する各種の會合は、多くは職員學生の協同より成れるものにして、師弟れ情誼を温め、校風の振興を謀るに於て與つて大に力あるものなり、然れども此等の諸會たる、各々別々の主旨と會則を有し錯雜、紛亂、爲に會務の澁滯を來し、活潑なる運動を妨ぐること少しとせず、如此きは實に會其物の主旨目的を達する上に於ても極めて不便利にして、延ては校風の發揚を礙碍するものあり、依て予の考ふる所は、出來得べくん

ば此等の諸會を合一して、一家庭的團體とおし、一貫の方針を以て會務を所せば、啻に事務の繁雜を除き得るのみならず、大に會運の增進を見るを得べし、故に此際先づ第一着手として經驗ある委員を撰出し、第二學期中を限りとして各會の調査を遂げしめ、以て徐に諸會の長所を畫せんと欲す、北辰會十全雜誌の如き、固より螢雪の餘光に過ぎず、加ふるに諸種の事情あり、爲に或は發行の期に後るゝこと多きが如し、將來は益々改良に加へて、机上の伴侶たらしめむと欲せ、北陸の天候實に險惡あり、諸子益々運動を盛にし、此天候を利用して身心を鍛錬するれ覺悟無らざる可らず、口意に協はず諸子予が意のある所を察せよと、之れ實に神機の一轉あり、吾人豈所謂大旱に雲霓を望み得たるの感無きを得んや、諸會合一の如き必ずしも成るを期す可らずと雖ども、ボールは高く運動場の天に飛び、オールは深く蓮湖の水を切り、辰章校の意氣勃々として昂るを期し得ん乎。

洞中天

○宮本教授を送る　尖風先づ寒樹に呵きて、林梢玉を擊げ、孤月銀海に搖く、而も雪は深く晩鐘幽に、行方を腦みて道なき山嶺に迷ふ者、豈に行路れ過客のみならんや、童謠あり北星去るべしと、人も我も其意を解せず、忽ちにして風評は校庭に流れぬ、宮本教授は去らるべしと、人も我も是を信せず、未だ旬日ならず、遽然一片の掲示は此風評を事實として證明したり、實に教授は我校を辭して、外務省飜譯官に榮轉せられたり、蛟龍長く池中の者に非ず、今や昇天の機雲は氏を迎へて、此を東都に奪へり、吾曹半千の青衿は理に於て、其行を祝せざるべからず、賀せざるべからず、然も情に於て痛苦禁ずる能はず、欷歔制すべからず、堂々五尺れ男子も爰に至つて路岐に嗚咽せざるを得ず。

教授鞭を我校に取られし事爰に週年有餘、長一と曰ふべかふず、而も吾曹の今や別たんとする袖の、而く時雨るゝ所以は、教授が感化訓誨れ深く肺腑に銘する有るに依る、其崎嶇歷落たる氣慨と、楚々卓々たる風手は、現に廻り、夢に歸りて、須臾も忘る能はず、噫嚱昔親しく接したりし、明晰たる言論、該博たる學識、莘々たる教誨、放奔たる論議は、空しく昔を忍ぶ、今は仇ある形見となり、松籟徒らに颯として祖席を掃ひ、轉だ人生れ刻薄たるを感ぜしむ。

教授職に在るの間、講學の外校長閣下を補佐し、誠意校務を處理せらる、頃來校規れ釐革、教務の振蕭、着々其歩を進めしは、蓋し教授の勞多きに居る、殊に教授性翰墨を嗜み、職餘文を草して本誌に如椽の筆を揮はれ、以て同學れ士を指導啓發し、噴珠湧璣の文、時に陸離たる光彩を本誌に添へふれし事、深く吾曹が感謝に堪へざる所なり。

教授今や去らる、行程百里關山徒らに遠くして、後會其れ何れの日をの期せん、時恰かも嚴冬、冀くは邦家れ爲め加餐せよ、送るに臨み敢て數行謟劣の辭を呈し以て離歌に代ふ。

○入江良之先生の新任　宮本教授の後を襲ひて、今回我校に赴任せられし入江法學士は、大學に於て佛法學を修得せふれ、業を卒へて後民間にあり、辯護士を職とし、傍ら教育事業にも從事せふれて夙に其名嘖々たり、今や我校に來りて教鞭を執ふる、吾曹は滿腔の熱情を以て先生を迎ふると共に、又先生れ諄々として清誨の化を垂れ給はん事を冀ふ。

○村上函峰先生の全癒　其德行と學才とを敬慕して止まざる村上珍休先生は、昨冬腹膜炎症を以て病褥に臥せふれしが、年の更まると共に鬼

魔先生が身を退きて、今や健康舊に復されしは、吾曹の深く賀する所なり、乞ふ保玉以て龜齡を保たれん事を。

青年歌文會成る

上は神代の昔より今明治の聖代に至る迄、其間時に隆替あるは免れざりしも、一系の統は綿々として絶ゆる時無かりし我國歌の、よしや其短詩形は取るに足らざるにもせよ、人の心を種として、發しては天地を動かし鬼神を感ぜしむるに至りては、豈他者の容易く企て及ぶ所あらんや、長刀能く人を殺すと雖も、時ありてか直ちに其肺腑を抉る匕首に及ばざる事あり、誰れか云ふ和歌は上代の遺物、似而非なる風流家の囈言と、知らずやミューズは葉末に於ける露の珠に其面影を宿し、ヴィナスは春風に落花の風情に想を寄する者と、三十一文字の國歌豈に自然の琴線を奏で、宇宙に於る一面の眞理を語らざらんや、苟も心を文學に傾け情を自然に擅にせんとするの士は、須らく先づ此れを知らざるべからず、此を知らんには親しく此に出入し以て其堂奥に昇らざるべからず、海底に入て初て眞珠を得、門外より觀て曷んぞ其是非を判するを得んや、爰に我校の有志者相計つて新たに青年歌文會を起す其主意書に、

蛙さへひとふしを哥ふと古人も曰へりけん歌の道、まして言だまの幸はふ國に民草誰れかは歌よまざらん、茲に某等いさゝむふ竹いさゝけき歌垣ゆひ廻して青年歌文會と名付つ、人丸赤人の流れは汲むや汲まずや、打圓ゐておの〳〵思ふ一ふしを泄さまほしうてあん、所謂主意とやらんは教外別傳あらねど曰ふに曰はれず說に說れず、唯一葉の飜る風の行衛に覺り給ひて、心有らん若殿原あはれ胄れ後あ見せ給ひぞ。

清玩與料　其一

と題して爰に諸君と共に味はふものは舊臘佐野助教授の許に記送せられし大學生の音書を摘錄せしものなり。至眞の文均しく如何に諸氏が舊交を懷ふ一片の中心より出たるかを見よ。楮墨の間に躍々たる諸氏（曰く中村曰く深澤曰く田邊曰く秋田、紅林の五氏）の卓見轉だ惻焉として欣羨し措らざるもの將に號を追ふて諸君と此清玩を頒たんとす。今左に屬するものは

中村光吉氏の折簡

氏は昨夏七月を以て本校に其業を卒へ今や大學に英法を專攻せらる。分袂昨の如し寐寤忘れ難く欣慕已まず往年竹刀取つての武者振は流石に天晴の光吉君中村氏君當年の勇今や乃ち如何寄語せ君ゞ身國に許すのみ君が身に非ず而も壯なりといひ敢て健なりといはず君乞ふ幸に加餐自重せよ。

（上略）學校も漸次面倒に相成る摸樣に御座候然し今迄は幾分規律あり且つ教場の秩序など相立ち居候學校に居りし身に御座候間此度の急激の變化卽ち恰も私立學校の如く下駄ばきの登場或は時を爭ひて席座を取り合ひ前方に出でん事を競ふなど實に目新しく感じ候學科の都合の如きは別にさしたる事も之なく筆記の如きは御校歷史浦井教授の講義を滿足に筆記致すと得ば十分に御座候樣覺え候然るに豫想と相反せし事は宮本教授の法通にて小生等は主としてTerryのみ講ぜられ度き由申居候得共今日より見れば先生の講義はTerryの講座に對してより寧ろ民法其他の講義に於て都合宜敷實に先生の講義の詳細なりし事を感ず候今一層希くば法通の講義筆記は夫れとしてテリーの原著を讀ましむる樣致しあば好都合ならんと存ず候（我校既に其圖に出づ君乞ふ之を

安んぜよ）之れ此度はテリー氏は活版を發行せず本年九月刊行致し候氏の著書The common law ある大部の書物を教科書と致し候もと此書は御校所用のテリーれ法通を詳細に布延致し候物にて頁數九百二十一其大さも中々大なるものにて之をテリー氏は講ぜられ候故に法語に通せざれば一々字書と首引にて讀まざるを得ざる次第に候故に御座候之には小生大に閉口致し居候其他講義おごは小生未だ少しも面白く御座おく毎日義務的に筆記致し居候次第御一笑被下度候殊にテリー氏の時間などには恰も寐言を聞く如く少しもわらふず眞實其言を解する者は見渡す所僅らに五六名位に見受け候語學れ未熟は情けなき次第に御座候故に大分歸宅を者多く殘りしものも中に睡入る者さえ有之候程に御座候（中略）教師達は講義れ序に參考書や列記致し候得共語學れ力乏しく之を讀み分ると出來ず殊に參考書は殆んど獨逸のみと云ふも宜敷二重に閉口致候亦獨逸の必要佛語の必要も追々生じ候と見え佛語にて卒業致し候人は獨逸を獨逸にて卒業致し候人は佛語を徐々に相始め候樣に見受け候（下略）

推心錄（二）

孤憤生

敢て赤誠を披く

鉄血宰相は言へる虚言者と臆病是れ殆ど同一のものなること多しと君子は正を踐て畏れず小人は自ら欺て恐懼す自ら信ずるなき者は常に他に壓せられざるを得ず言はんと欲す勇氣の欠乏を奈何、語らんと欲す自己の利害を奈何一顰一笑惴々として瞬時も安んぜず亦憐むべきにあらずや熱血の士正義の人須らく所信を吐露して天に訴ふべし若し安んじて一室に靜坐するを得ば禍害の身に起ふざるべきは「パスカル」れ言を須たずして明かなり而かも吾人は枯木死灰の如く血なく涙なく一片の同情をも有せざる俗禪家を氣取りて終るべきか吾人は其自由を犧牲に供して迄でも自ら愛惜せざるを得ざるの至誠にして動ござるもの未だ曾てあらざるありたとひウォルムスの殿堂悉く化して惡魔となるも我れは行らんと叫びし「ルーテル」の英風を想見せずや事の輕重を論ずる勿れ一葉落つるも尚ほ大氣の微動を感ず事小なるを以て默從すべきにあらず胸間少しく蔚勃の氣あり余豈に漫りに言を弄せむや流に順ふて棹すは易く波に激して漕ぐは難し夢温りにして荒鷄曉を報ずるも誰れこの喜で覺めんや晨鷄を憎まざれば幸なり改革の困難なる原とより其處とを故に「フッス」前に倒れて「ルーテル」後に憤死し慘酷なる虐殺を極めて耻辱の平和に終る蓋し改革の業や數理の如き單純なるもれにあらず又一人の能く成效し得べきもれにあらざるなり今日に於て所謂改革とは多く皮層的改革を意味す而のも是れ尚ほ時に頗る困難なるものなり余は疑ふ世の急進家は改革…勿論皮層的…を用て虚名を求むるの一手段と誤認せざるやを或者は言ふ眞實の革命に於ても先づ急進家の必要を見る蓋し識見おき人物即ち事の難易と時の緩急とを料らず直に其思想を實行せんとするの人は革命の先鋒たるの資格を有すと然り愚直に近き彼れは人事の曲線的たるを解せずして一直線に暴進せんとす故に彼れは其進路に多くの障害を有し事の成るを見ずして己れ先づ倒れんれみ即ち多くの場合に於て彼等の先づ倒れたりしは歴史の明かに證する所なり然るに茲に彼等は倒れざらんと欲す唯一の自衛策在るのみ曰く權力の運用是なり世に權力の施用ほど厭ふ

べきはなし而りも自ら立てたる權力の活用は尚ほ可なり他より授けられたる權力の濫用に至ては眞に惡むべし建設的英雄「ナポレオン」の國威宣揚と文物憲章の美とを以てして尚ほ且つ之を厭ふものあり而りも是れ汚濁の世界に於てす神聖なる教育界は道德に基き人情に依る斷じて威權を以て下に臨むを許るさずさふぬだに教育は一面に於て人心を開發すると同時に他方に於ては著しく人心を奴隷にするあるをや

誠意は沈默を許るさず余は明らに言はんとす若し余が言にして誤あらば信實なる同窓諸君は敢て其非を正さに躊躇せざるべし。近頃聞く北辰十全の二會を散ぜて新に全校統一れ一會を組織せんとすと委員某君に就て略ぼ其改革の要領を窺ふを得て余呆然として驚き喟然として嘆息す嗚呼何すれぞ其計畫の粗漏杜撰あるや玆に其弊害れ最大なるものに就て所信を述べ當局者の三省を仰がんとするは誠に已むを得ざるに出づ。

一、會員に就て

本會設立の精神を問はゞ當局者は口を齋へて對へん學生間の親睦を厚くして誘掖の實を擧げ体育を奬勵し校風の發揚を期すと然り故に當局者は說をなして曰く本校の學生たるものは擧げて入會すべし是れ義務あり家族の一人が獨り其家風に脊くべけんやと何ぞ其言の美あるや余は最も義務なる語の濫用を厭ふ當局者の說に從へば吾人が兵役に就くが如く其入會を免れずといふか何ぞ夫れ然らんや抑々本會の設立は毫も學校の施設に關係なく單に學生間の合意に成り學生の大部分が之を否拒すれば原とより其成立を望むべからず吾人は設立の曉に於て始めて便宜上會長を仰ぐ然れども會の建設に當て之を命令するが如き權力者を認めむや殊に義務なる語を利用して好まざる者にさへも入會を強うるに至ては全く設立の精神に脊馳するものなり或は傳へて曰く全校會員は畢竟本會の意志にして其成否は當局者の方寸にありと余は其所謂方寸の意味を解せずと雖も或は權力を以て之に臨むにあらざるの不幸にして果して斯くの如くならば其會たる己に精神的に自殺せしものなり假令會員名簿幾百れ名を記するも烏合の衆は用ふべからず何ぞ其目的を達するを得んや是れ余が熱心に全校に向て會員たるを強うるの非を主張する所以なり

二、大學豫科と醫學部合併の困難

氷炭相容れず水火相激す類を以て結合し好む所に從ふて分離すべきは必然あり大學豫科と醫學部との如きは全然學生の性情と職業とを異にす故に凡ての關係に於て兩者の合同は決して望むべからず然るに强ゐて之を同一の會の下に置かんとす亦難い哉余は毫も其必要を見ざるのみならず策の最も拙なるものと信ず斯くの如くんば兩者自然の發達を妨げ其間互に不平を生ずべきは火を覩るよりも明かあり然かるに當局者知て之を必要とするは唯だ一に懸つて會費徵收の上に於て便利あることの点に在らむ是れ甚だ謂れなきことなり

三、各部分類の不當

組織上其各部を區別するに於て余は甚だ其當を得ざるを見る思ふに熱心忠實なる委員諸君は之に就て評論されしあるべし就中最も解すべからざるは運動部中に擊劍柔道を混入せしことなり由來此二科は体操科の副科として學生が組織する會よりは獨立せしものにして當局者最も厚く保護を之に與へたり(一)蓋し今日他の運動の殆ど廢絕せるにも關らず此二科の尚ほ見るに足るもの豈に偶然あらむや然るに今之をしも他の遊戲中に混入せんとす何ぞ進て体操科をも之に加

へざるか余は此二課の盛を喜ぶが故に他の遊戯と輕重せざるを得ず又現在の端艇會の始末に於ても事狀の紛糾するの故を以て漫然解散するを許るさゞるべし其雜誌部と運動部とは會計を一にするが如きも亦多少の遺憾なこのふむや

四、會費徵收法

般鑑遠からず當局者の會計に心を勞するも亦宜あり余は聞けり北辰會に於ける會計の紊亂甚しうりしを當局者特に大に戒心して會計整理の必要を認め多少の困難を排しても成效せんと企つるなるべし余亦著しく其必要を認む然れども退て考ふるに北辰會々計の紊亂は會費の不足なるが故にあらずして會費の未納者多きに因る此点に於ては會員原とより責ありと雖も當局者たるもの亦多少の責任を分つべきあらふむや殊に北辰會に於ても其退會の稍困難ありしが爲に會員名簿に記載する數と眞正の會員數と近時に於て大に齟齬する處あるに於てをや新會設立の當局者は會費納付の規定を掲げて曰く會費は年額壹圓五拾錢第一期の授業料と共に納むべしと余聞て大に笑ふ何ぞ其妙案あるや何ぞ其便利なるや若しも命令が凡て斯くの如くにして滿足を以て歡迎せらるゝものならば誰れか亦心を勞せむや斯くの如き徵收法の便利なることは誰れか今日に於て始めて知らむや吾人は餘りに當局者の同情を欠くに驚く血なき者は默從せよ涙あき者は電同せよ言ふ勿れ我校に來り學ぶものは皆富貴れ子弟なりと豈に其間飛霰破窓を打つの深夜寒燈の下火爐れ手を温むるあくして苦學するの二三子あからむや嗚呼々々唯會計を二三にするの不便を以て會の統一を求めざるを得ざるか會費徵收の煩勞を厭つて一期に之を納むるの必要あるが吾人は一人の親切なる會計係を得る能はざるか余甚だ惑ふ殆ど其言ふ處を知らず

余は斷言す義務ある語の下に自由を犧牲として、までも新會れ設立を希望せざることを聊か衷情を叙す誠を輸すも或は聽のれざらんか是れ吾人れ罪なり亦誰をか怨みん。

寸鐵

明治三十一年は逝き、三十二年は來る。

柳芽は未だ眠圓らかありと雖、梅蕾は已に珠と綴りぬ、氷雪は尚ほ三冬の色褪せずと雖、街頭曉は自ら雍熙の光景はあり、國光宇内に輝き、皇威八荒に加はる、聖代年を重ぬると玆に三十二回、吾人幸に此聖世に生れ諸君と共に謹で新年を迎ふ、迎へて而して之を樂む、樂み筆硯の中にあり椒酒の醉にあらず、楮墨の間にあり雜煮の腹にもあらず、筆硯と言ひ楮墨と言ふもの、吾人の期する所果して那邊にある乎、敢て歳首に於て切に諸君の反省を乞はんとす。

唇上妖聲を漏すの髯士が喜劇は吾人の耳に忍びざる所、師弟の搆墻は吾人の言ふに忍びざる所、朋黨的睨視の醜体は吾人の夙に陋とする所、此の如き小度量、此の如き小感情は以て能く宿意を啓くれ所以に非ざるあきと得んや、於是か吾人は協和共致の急を認め、方策一貫の急を認め、偖は區々たる啞蟬的問題の爲に施意進捗の機を誤らざらんと認む、竿頭一歩更に我校が天下れ責に任ずて百事實行を示さんをこそ望まざるを得ざるなり、吾人は敢て其認むる所の實を擧げんと期す、否寧ろ諸君の驥尾に附して孜々唯之を勗むるに忠僕たらんとす。

吁三十二年は來る、三十二年の春を迎ふ、天に清光あれよ、地に平和あれよ、汲む若水に色添ゆる緑もうしの今朝の春、樂しい

哉此の新春、快ある哉此れ前途。(つゆ)

○兩儀の下孰か汝孰か我、千載の中誰か興り誰か亡ぶ、喜怒哀樂偖は疑猜、均しく之れ人々の心のおき所、萬象の本源皆彼に非ずして此にあり、遠きに非ずして近く、方寸の中にありと知らずや。(黃兒)

○人心維れ危く道心維れ微なり詐て恥ぢず欺て顧みず鄙劣陋醜學生にして尙ほ斯くの如しとせば邦家の前途亦悲むべきかな。

○盲從といふ諂諛といふ己れの所信を枉げて他れの權勢に屈するなり。否と言ひ得ざる者は男子にあらず由來柔順は唯婦女子の德にあらずや。

○粗暴輕噪匹夫の勇に誇るもの、巧言令色才子を氣取るもの、共に卑むべきのみ丈夫氣節を尙ぶ意氣に感ずれば功名を論せず魏徵の男子たるを見る。(以上孤憤子)

○下を警めて上自ら犯さば奈何、過は顯はれざるを以て免るゝこと能はず言行相伴はざるもの安んぞ衆を御するを得んや。

○過ぐらんことを努むるには勇氣を要す過つて改むるには更に勇氣を要す強ゐて過を蔽はんとするは終に罪に陷ぶんとするものなり。

○學士は必ずしも教育家たるを得ず講釋士原と より教師にあらざるなり學生をして學科の趣味をも覺ふしむる能はず又獨立の精神をも鼓吹するなし教育の精神なき教育家(?)の下に學生の品性は愈下れり是ある哉

○教育家服從と喜びて學生は諂諛に巧あり彼れに誠無く此れに誠無し師の向ふ所弟子之に趨く鰥道悠々愛に至て亦至れる哉(危言生)

○告朔の餼羊は去る可ふず況んや新年を賀し君が代と祝するは人間の大禮なるに於てをや何者れ無禮漢ぞ曰く虛禮なり贅費なりと而も彼等生平の驕奢淫佚を節するを知らず

○吾人辰章旭釦の制服制帽整々堂々たるは宜ふん矣然れども門外れ沐猴冠者之を亂用して意氣揚々たるものを如何ー弊源濫販を許すにありー由是觀之整々堂々は制服制帽にあらずして眞個人物に在り六百の健兒此意味に於て果して皆整々堂々たる?(大寬生)

○……何故に諸君は來らざる…抑も諸君と莫逆の契を結びしは數年の以前にあり花にも月にも相携へて蓮湖の上に逍遙せし者を……春秋二期には滿城の士君子が喝采の中に月桂冠を戴くを此上もなき光榮とせーなるに……替ては東都の健兒東北の勇士と覇を爭はんとし給ひし諸君が雄氣は今何處にあるや吁嗟ぬ己る哉然れ共是が源因は……を知る敢て諸君をみ怨む可きに非ず唯諸君と約すらく今の春若し前轍の擧に出でゐば生は憤死以て殘骸を湖底に托せんのみ敢て腹心を布く(ボート生拜)

○相手が木石ならぬ以上は法を以て我意の如く制すべからず上下の一致融和を計らん欲ゐせば或点に於ては我意を枉げずる可ふず蓋し剛腹は人をして離反せーむれば也。

○法を以てするは夏の日の如く冬の霜の如ー可恐可憎、情を以てするは冬の日の如く春の雨の如ー可親可受、情の悲きは山海をも動かし法の煩なるは禍其身に及ぶ商君是なり。(忠子)

打とけて氷と水の
中なほり　貞德

投書心得

一投書は本會原稿用紙に限り御認めありたし
一長文と雖も全文を寄贈せされは掲載せぎ
一雜誌上には雅號のみを記載することを許せども姓名は必ぎ編輯委員まで御報道あるべし
一學理上の論說諸小會の記事雅文詩歌等續々寄投ありたし勿論言の或は政治を論し或は德義に背くものは一切掲載致さゞるべし

明治三十二年三月一日印刷
仝　年三月五日發行

編輯兼發行者　松村大吉　金澤市長町川岸五番地清水祐世方
印刷者　佐々木惣一　金澤市川上新町三丁目二番地松本凌方
發行所　第四高等學校北辰會
印刷所　活版合資會社　金澤市高岡町三十四番地

（明治二十八年二月二十七日内務省許可）